

美里町文化財調査報告書第2集

一本柳遺跡

平成19年3月

宮城県美里町教育委員会

一本柳遺跡

序 文

美里町は平成18年1月1日、宮城県北東部に位置する遠田郡内の小牛田町・南郷町の2町が合併して誕生した自治体です。町内には豊かな自然のなか、国指定史跡「山前遺跡」、町指定民俗文化財「閑根神楽」などをはじめとした歴史遺産が数多く存在し、大切に守り伝えられてきました。これら文化遺産は町民はもとより国民共有の貴重な国民的財産であり、次世代に継承していくことが今に生きる我々の重大な責務であります。また保存とともに積極的に公開・活用を行うことが求められています。

しかし一方では、大規模な土地区画整理や、個人住宅建設などの各種開発事業が年を追うごとに激化しており、特に埋蔵文化財は土地との結びつきが強いことから、破壊・消滅の危機に晒されることが多くなってきております。

このたび調査の対象となった一本柳遺跡では、平成7~11年に鳴瀬川の堤防改修と中流堰建設計画に伴う発掘調査が、平成10~13年に県営ほ場整備事業に伴う発掘調査が宮城県教育委員会により実施されました。この結果、奈良・平安時代には掘立柱建物群が規則的に配置されており、官衙的集落であった可能性をもった古代と中世・近世における複合遺跡であることが確認されています。

本書は、町道一本柳線改良工事に伴い平成18年に実施した一本柳遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。これらの成果が、地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

このたびの調査に当たりまして、宮城県教育庁文化財保護課には職員の派遣等、絶大なるご指導、ご支援を頂きましたこと、改めて心から感謝申し上げます。また、現地で調査作業に当られた方々、関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。ここに関係各位に対して慎んで敬意を表するとともに、今後も皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願いする次第であります。

平成19年3月

美里町教育委員会

教育長 宮 嶋 健

例 言

1. 本書は、町道一本柳線改良工事に伴う「一本柳遺跡」の発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査は美里町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、美里町教育委員会が担当した。
 3. 各遺跡の保存協議や発掘調査および報告書作成に当たっては、各関係者並びに以下の方々・機関からご協力・ご教示をいただいた（敬称略）。
- 及川 規（東北歴史博物館） 多賀孝弥（多賀城市埋蔵文化財センター） 東北歴史博物館
4. 本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺 = 1/25,000 の地形図を複製して作成した。
 5. 本書における土色の記述については、『新版 標準土色帖 1994年版』（小山・竹原 1994）を用いている。
 6. 測量原点の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標第X系による。
 7. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。
SI：堅穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SA：柱穴列 SD：周溝状遺構・区画溝跡・溝跡
SE：井戸跡 SK：土壙 SX：その他
 8. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、岩渕竜也（美里町教育委員会）、佐久間光平・佐藤貴志（宮城県教育委員会）が執筆・編集した。
 9. 発掘調査の記録や出土遺物は美里町教育委員会が一括して保管している。

調 査 要 項

遺 跡 名：一本柳遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：39044 遺跡記号：I-Z）

所 在 地：宮城県遠田郡美里町字新一本柳

調査原因：道路改良工事

調査主体：美里町教育委員会

調査担当：美里町教育委員会 岩渕竜也

宮城県教育庁文化財保護課 佐藤則之 須田良平

佐久間光平 佐藤貴志 千葉直樹

調査期間：平成18年6月1日～9月26日

調査面積：約730m²

目 次

序 文

例 言・調査要項

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	3
3. これまでの発掘調査	3
第Ⅲ章 発掘調査	4
1. 調査の方法と経過	4
2. 基本層序	6
3. 検出遺構と遺物	7
(1) 古代	
1) 検出状況	7
2) 遺構と遺物	10
《S区》 A. 積穴住居跡 B. 据立柱建物跡 C. 周溝状遺構 D. 溝跡・溝状遺構 E. 土壙 F. 不明遺構 ほか	
《N区》 A. 溝跡	
(2) 中世	25
1) 検出状況	25
2) 遺構と遺物	25
《S区》 A. 区画溝跡、その他の溝跡 B. 杖穴列 C. 土壙	
《N区》 A. 区画溝跡、その他の溝跡 B. 井戸跡 C. 土壙	
第Ⅳ章 総 括	39
1. 古代	39
2. 中世	40

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 一本桺遺跡の位置	1	第15図 土器集中地点の遺物	21
第2図 一本桺遺跡と周辺の遺跡	2	第16図 SD118・SD119講跡とSD119出土遺物	22
第3図 調査区の位置	4	第17図 VI層、その他の出土遺物(1)	23
第4図 調査区配置図	5	第18図 VI層、その他の出土遺物(2)	24
第5図 層序模式図	7	第19図 中世遺構全体図	26・27
第6図 古代遺構全体図	8・9	第20図 S区南の遺構	28
第7図 S区南の遺構	11	第21図 S区北の遺構	29
第8図 SI108・SI109竪穴住居跡	12	第22図 SD01・SD10、SD02出土遺物	31
第9図 SI108・SI109出土遺物	13	第23図 N区中央の遺構	33
第10図 SB116縦立柱建物跡、SD105周溝状遺構・SD115溝状遺構	15	第24図 N区北の遺構	34
第11図 SD105出土遺物(1)	16	第25図 SD17・SD23、SD24H出土遺物	35
第12図 SD105・SK107出土遺物(2)	17	第26図 N区南の遺構	37
第13図 SD110・SD114周溝状遺構、SK101上塚、SD102講跡ほか	18	第27図 SE15、その他の出土遺物	38
第14図 SD110・SD114・SD102、SK101出土遺物	20		

表 目 次

第1表 古代遺構一覧	10	第2表 中世遺構一覧	25
------------	----	------------	----

写 真 図 版 目 次

図版1 一本桺遺跡と調査地点	44	図版9 中世の遺構(5) - N区 -	52
図版2 古代の遺構(1) - S区 -	45	図版10 古代の遺物(1)	53
図版3 古代の遺構(2) - S区 -	46	図版11 古代の遺物(2)	54
図版4 古代の遺構(3) - S区 -	47	図版12 古代の遺物(3)	55
図版5 古代の遺構(4)、中世の遺構(1) - S区 -	48	図版13 古代の遺物(4)	56
図版6 中世の遺構(2) - S区 -	49	図版14 古代の遺物(5)、中世の遺物(1)	57
図版7 中世の遺構(3) - S区・N区 -	50	図版15 中世の遺物(2)	58
図版8 中世の遺構(4) - N区 -	51		

第Ⅰ章 調査に至る経緯

旧小牛田町（美里町）は、町東部の一本柳地内において、生活道路である町道一本柳線の幅員が狭く通行に支障を来たしている状況であったことから道路改良工事を計画し、道路拡幅および舗装改良工事を実施することになった。

平成16年3月、旧小牛田町建設課から宮城県教育委員会へ道路工事と遺跡とのかかわりについての協議書が提出された。工事予定地は古代・中世の遺跡である一本柳遺跡の範囲内であったことから、平成16年4月7日に旧小牛田町教育委員会・旧小牛田町建設課、宮城県教育委員会文化財保護課で現地協議を行った。一本柳遺跡では平成7年～11年度にかけて大規模な発掘調査が行われ、古代～中世の多数の遺構や遺物が検出されているが、今回の事業予定地はこれらの調査区に隣接しており、遺構・遺物が検出される可能性が高いことから、平成16年4月に宮城県教育委員会より発掘調査を実施する必要がある旨の回答がなされた。

町合併後の平成18年3月22日に地域住民を交えて調査

期間・調査方法等について協議を行った。平成18年5月2日には美里町建設課より発掘通知が提出された。これを受け、発掘調査は美里町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課の協力の下、美里町教育委員会が担当して実施することとなった。



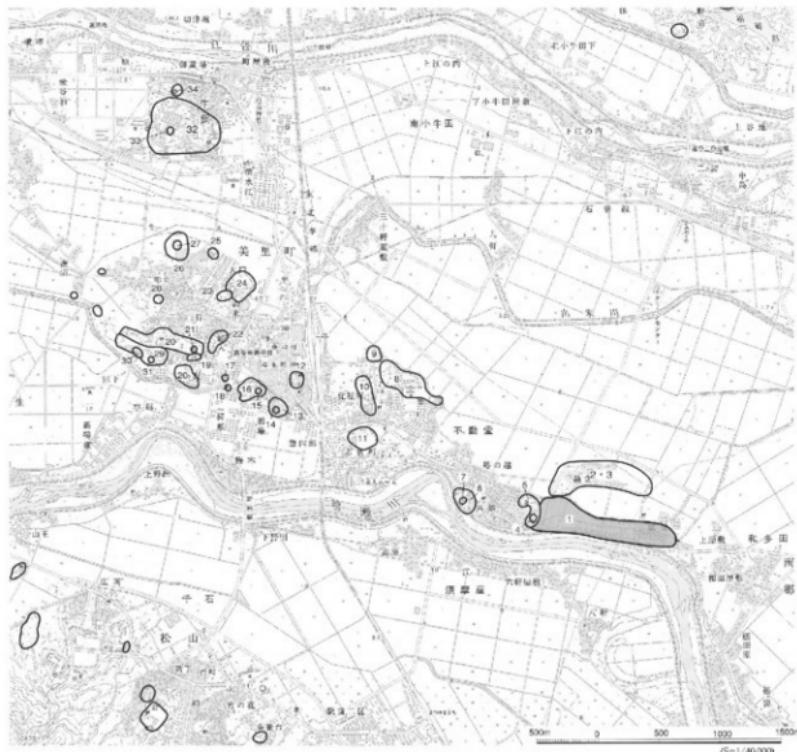
第1図 一本柳遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

一本柳遺跡は、宮城県遠田郡美里町字一本柳・新一本柳・塩釜に所在する（第1図・第2図）。美里町は仙台市から北東に約40km離れた県北中央部に位置し、地理的には江合川や鳴瀬川が流れる大崎平野東縁部にある。南には大松沢丘陵が西から東へ延び、北には笠岳丘陵が南東方向に延びており、これらの間を江合川と鳴瀬川が東流する。両河川の間に標高15～30mほどの低丘陵が残っており、牛飼・彌堂・不動堂地区などにおいては現在の市街地をのせている。また、両河川沿いと低地内には東西あるいは北西～南東方向に延びる自然堤防が発達している。

遺跡は美里町の街中心部から南東に約3km離れた不動堂地区にあり、鳴瀬川によって形成された標高9.5～10.0mほどの自然堤防上に立地する。その範囲は東西約1.2km×南北約300mに及び、現況では民家や畑・水田などとして利用されている。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	一本柳遺跡	自然起伏	散佈地	全員、平窓、中窓、近窓	18	後谷神社古墳	丘陵	円頂	古墳
2	小沼遺跡	台地縫隙	散佈地	古代、中長	19	静那森穴古墳群	丘陵斜面	垂穴道	古墳後
3	山田遺跡	自然縫隙	散佈地	古代、中長	20	即木七郎跡	丘陵	墓地	中世
4	坂谷寺古墳	丘陵	円墳	古墳中	21	鶴谷古墳	丘陵	円頂	古墳中
5	坂谷寺古跡	丘陵	破壊	中長	22	伯人遺跡	丘陵斜面	散佈地	绳文後
6	西能路	丘陵斜面	散佈地	中長、近窓	23	八幡古墳群	丘陵	円頂	古墳後
7	體滿山古渡	自然船跡	古渡	古墳	24	渕本遺跡	丘陵	集落	绳文、古墳中、後、食丸、平安、中世、近世
8	塩山古路	丘陵	散佈地	圓窓跡、古代	25	東谷寺古墳	自然緩傾	円頂	古墳後
9	小町井古路	丘陵麓	散佈地	古代	26	坪庭遺跡	自然緩傾	散佈地	古代
10	蛇骨坂古路	丘陵	散佈地	古代	27	坪庭古墳	自然緩傾	円頂	古墳
11	三笠堂城跡	丘陵	破壊	中長	28	形差遺跡	自然緩傾	散佈地、古墳	漢文前・中・後、古墳、古代
12	京阪理古墳	丘陵	前方後円墳	古墳中	29	(国史跡)山前跡	丘陵斜面	貝塚、集落	漢文後～中、古墳、古代、中世
13	櫻吹差跡	丘陵	散佈地	古代	30	新山遺跡	丘陵斜面	貝塚	漢文早・中
14	櫻吹古塚	丘陵	円墳	古墳後	31	一本木古墳	丘陵斜面	古墳	古墳後
15	目股塚古塚	丘陵	円墳	古墳	32	牛臥遺跡	散佈地	圓窓跡	绳文後、古代
16	唐山貝塚	丘陵	貝塚	桃草丈	33	土塙古墳	丘陵	円墳	古墳
17	保土塚古墳	丘陵	円墳	古墳中	34	山内跡	丘陵	散佈地、城跡	古代、中世

第2図 一本柳遺跡と周辺の遺跡

なお、本遺跡は古代・中世の集落跡として登録されており、後述するように、これまでにも数度の発掘調査が実施されている。

2. 周辺の遺跡

美里町内には縄文時代から中・近世までの遺跡が数多く存在する（第2図）。縄文時代の遺跡は標高20~30mほどの低丘陵上に分布しており、早期の素山貝塚（16）、前～後期の彌堂遺跡（28）、早～中期の山前遺跡（29）、新山前貝塚（30）、後期の船入遺跡（22）、晩期の峯山遺跡（8）などがみられる。弥生時代の遺跡は少なく、新山前貝塚、彌堂遺跡で遺物が発見されているのみである。

古墳時代の遺跡では、古墳が低丘陵ないしは自然堤防上に分布しており、一本柳遺跡西側の低丘陵上に立地している岐善寺古墳（4）をはじめ、京鉢塚古墳（12）、保上塚古墳（17）などの前・中期の古墳や時期が不明なものも含めて17の古墳が存在する。集落跡としては国指定史跡山前遺跡、駒米遺跡（24）などがあり、前者では前期の堅穴住居群とともにこれらを区画する大溝跡が発見されている（小牛田町教育委員会 1976）。

奈良・平安時代の遺跡には駒米遺跡、化粧坂遺跡（10）、峯山遺跡、狐山遺跡（3）、小沼遺跡（2）などの集落跡がある。これまでに、駒米遺跡（宮城県教育委員会 1998）、化粧坂遺跡、小沼遺跡（宮城県教育委員会 2000・2001b・2002）では発掘調査が行われており、この時期の集落の状況が解明されつつある。

中世の遺跡の多くは館跡であり、一本柳遺跡のある不動堂地区の低丘陵上には、一本柳遺跡と隣接する岐善寺館跡（5）、西館跡（6：鶴頭城）、志賀堂城跡（11）が近接して存在する。また、牛飼地区にある応安四年（1371）の銘を持つ大型の板碑をはじめ、鎌倉～南北朝時代にかけての板碑が町内には多数残されている。

3. これまでの発掘調査

本遺跡ではこれまでに発掘調査が度々行われているが（第3図）、平成7年～11年度にかけて実施された鳴瀬川堤防改修などに伴う発掘調査は最も規模が大きく、約30,000m²の面積が発掘調査されている。この一連の調査では、古代の規則的に配置された倉庫群と周溝状造構・土壙群からなる集落跡、中世の大溝で区画された屋敷跡が多く検出されている（宮城県教育委員会 1998・2001a）。古代の集落は、一般集落とは異なり、在地有力者または富豪層の居宅を中心とした集落と考えられ、また、中世の屋敷には在地領主級の武士の屋敷があることが判明した。

この他、平成11～13年度には出来川右岸地区基盤整備事業に伴う調査が行われ、古代の畦畔と溝跡が検出され、本遺跡の北側に隣接する小沼遺跡との間の低地に古代の水田跡が広がっていることが分かった（宮城県教育委員会 2000・2001b・2002）。

さらに、平成17年度には遺跡北西部で工場移転に伴う確認調査が行われ、古代の周溝状造構や中世の掘立柱建物跡、溝跡などが検出されている（美里町教育委員会 2007a）。

第Ⅲ章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

改良工事予定の現道は付近の住宅の生活道路として當時利用されており、迂回道路の確保が困難であることから、発掘調査の際には調査対象区域を5つに分割し、調査は4回（①：1区、②：2・3区、③：4区、④：5区）に分けて実施することになった（第3図・第4図）。各調査が終了次第埋め戻しを行い、生活道路を確保した上で次の調査区へ進んでいくという方法をとった。

調査に際しては、工事区域に沿って設置されていた杭を測量原点BM1とし、これとBM2を結ぶ線を南北の基準線に設定して、南北の基準線およびこれと直交する東西軸をもとに3m方眼を組み、グ



第3図 調査区の位置

リッドラインはさきの測量原点BM1を(0, 0)に設定して東西・南北方向の距離(N10, S10など)で表した(第6図・第19図)。

基準点は、世界測地系にもとづく平面直角座標第X系による。

BM1 : X=-163,568.072

Y=22,658.336

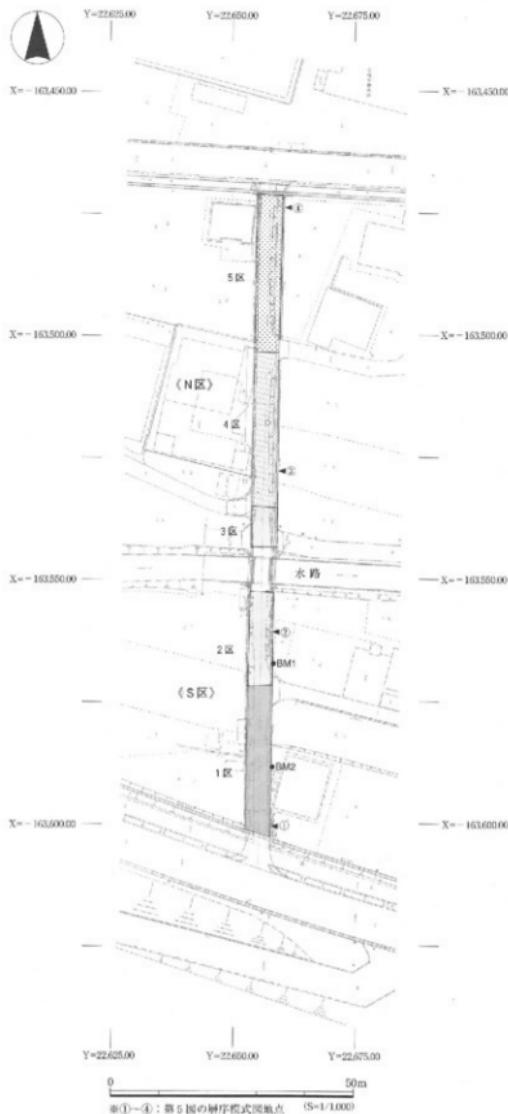
BM2 : X=-163,588.071

Y=22,658.113

遺構の実測図は、平面図については縮尺=1/100および1/20、断面図については1/20で作成した。写真撮影には6×7サイズのモノクロおよびカラーフィルム、デジタルカメラ(1000万画素)を使用した。

発掘調査は南側の1区から着手し、最後は北側の5区で終了した。遺構面は古代と中世の二面があることから、中世の遺構検出面までは重機で掘り下げ、その後遺構の精査を行い、古代遺構の検出に際しては手掘りで掘り下げて精査を行った。各区の調査経過は以下のとおりである。

1区：6月1日～7月5日。調査区は幅6m×長さ32m、面積は192m²。上面のV・Vla層では区画溝や掘立柱建物跡、土壙などの中世の遺構を検出した。中世遺構の精査・記録を行ったのち、V層・Vla層上部を掘り下げ、下面のVib層面で古代遺構の精査を行った。その結果、南半部から竪穴住居跡



第4図 調査区配置図

2軒、掘立柱建物跡1棟、周溝状遺構3条、溝跡5条などを検出した。北半部には“灰白色火山灰”が堆積しており、古代の遺構は確認されなかった。

2区・3区：7月14日～7月27日。2区と3区の間には現水路を挟んでいる。2区は幅6m×長さ17m、3区は幅6m×長さ9m、面積は計154m²。2区ではV・Vla層面で1区の区画溝と連結するとみられる区画溝、土壌など、3区では井戸跡などが検出された。その後、V・Vla層を掘り下げて古代の遺構の確認に努めたが、3区で溝跡1条を検出したに留まった。

4区：8月7日～8月27日。調査区は幅6m×長さ30m、面積は180m²。V・Vla層面では大溝跡（幅3.5m・深さ1.5m）1条、井戸跡、土壌などを検出した。Vlb層面では古代の遺構は検出されなかつた。

5区：9月11日～9月22日。調査区は幅6m×長さ34m、面積は204m²。V・Vla層面では大溝跡、その他の溝跡、土壌などを検出した。大溝跡（幅3.8m・深さ1.5m）は4区検出の大溝跡と連結し、区画溝になることが分かった。Vlb層面では、北端部で溝跡1条を検出したのみである。

5区の調査終了後に埋め戻しを行い、1区～5区の一連の野外調査は9月26日にすべて終了した。



写真1 調査区近景



写真2 調査状況

2. 基本層序（第5図）

調査区は標高9.2～9.8mほどの自然堤防上に位置しており、微地形をみると南側がやや高く、北側が低い。その高低差は約50cmほどである。堆積層はほぼ同一であるが、低地にのみ薄く灰白色火山灰の堆積が認められる。以下の層序は、以前の調査（宮城県教育委員会 1998・2001a）と基本的には同じである。

I層：表土（盛土・耕作土など）

II層：a：にぶい黄褐色（10Y4/3）シルト、b：灰黄褐色（10YR4/2）シルトに細分できる。調査区全体に厚さ20～30cmほど堆積する。水の影響による堆積層の可能性がある。

III層：黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト。調査区全体に15～20cmほどの厚さで認められる、中世期の堆積層。2～5区にかけては上部がやや乱れており、にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトが不均質に混じる層：(III)が認められる。

IV層：黄灰色～灰色（2.5Y～5Y6/1）粘土質シルト。今回の調査区では確認できていない。

V層：灰白色火山灰（10世紀前葉頃に降灰したと推定される火山灰：十和田a）。1区北半から北側に分布。

厚いところで2～3cmほどある区域もあるが、ほかは薄くて痕跡的。

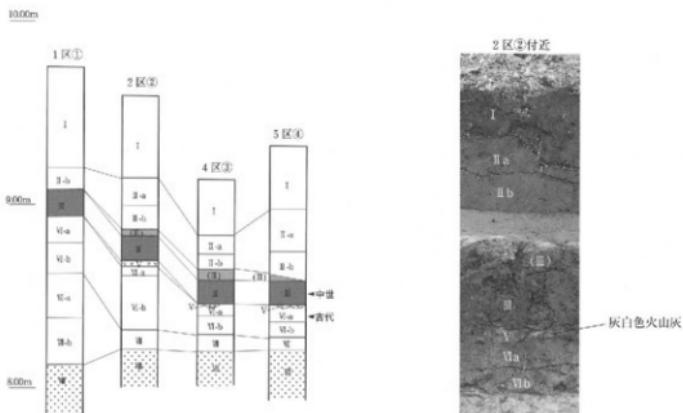
VIa層：黄褐色（2.5Y5/3）シルト。5～10cmほど厚さがあり、調査区全体に認められる。

VIb層：黄褐色（2.5Y5/3）粘土質シルト。VIa層よりやや明るく粘性が増す。酸化鉄の沈着あり。

調査区全体に分布する。古代の遺構確認面。

VII層：にぶい黄色（5Y6/3）粘土質シルト。粘性があり、酸化鉄の沈着が多い。地形的にやや高い1区では2層に細分（a：オリーブ褐色シルト、b：黄褐色粘土質シルト）できる。一部グラライ化。

VIII層：にぶい黄色（2.5Y6/3）砂層。粗砂～細砂。グラライ化。



第5図 層序模式図

3. 検出遺構と遺物

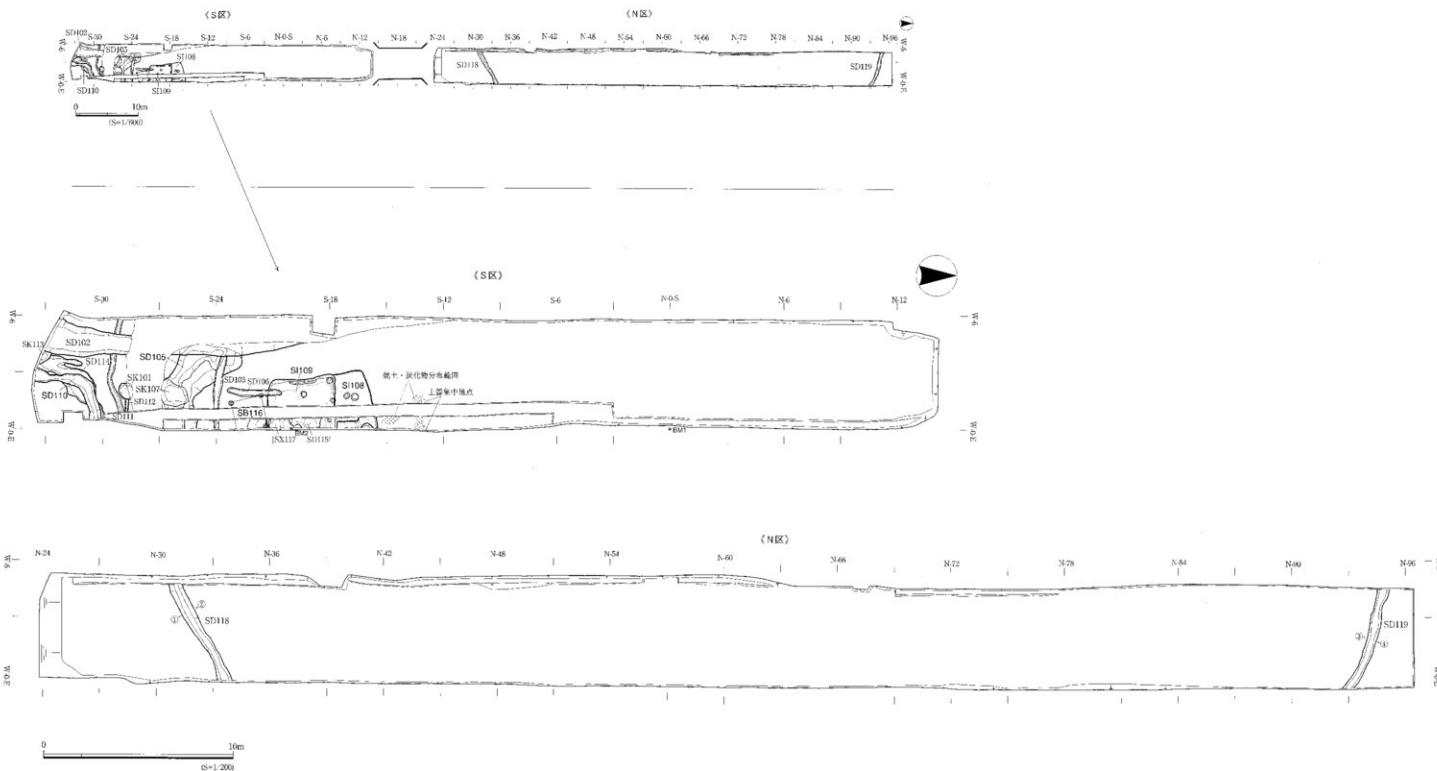
調査の際には、南北に細長い調査区を1～5区に細分しているが、以下では現水路が通る2区と3区の間で区分し（第4図）、S区：1・2区、N区：3～5区と改めて二分して説明していく。

古代の遺構・遺物はS区南区域を中心に分布しているが、中世の遺構・遺物はS・N区全体に及んでいる（第6図・第19図）。

(1) 古代

1) 検出状況（第6図、図版2～5）

微地形的にはS区南側がやや高く、N区北側へ向かって徐々に高度を下げている。古代遺構の検出面であるVIb層は、S区南とN区北ではその高低差が40～50cmほどある。遺構は地形的にやや高い



第6図 古代遺構全体図

S区南半部に集中しており、S区北半部からN区では小規模な溝跡が2条検出されたのみである。この区域では厚さ2~3cmもしくはブロック状に“灰白色火山灰”の堆積が認められる。

S区南半部では竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、周溝状遺構3条、土壙1基、溝跡・溝状遺構4条などの遺構が確認された。また、土器集中地点や焼土・炭化物粒の分布なども認められた。これらの遺構にはそれぞれ重複関係が認められる。ただ、調査区が狭いため、遺構はいずれも部分的な検出に留まっている。

第1表 古代遺構一覧

遺構種類	遺構No.	地区	特徴		基
			形 状・規 模 ほか	備 考	
竪穴住居跡	SI108	S区	方形状:東西3m以上・南北3m以上。		8
	SI109	S区	方形状:東西3m以上・南北3.5m。北辺にカマド。	SI108より新。	8
掘立柱建物跡	SB116	S区	1間×1間。柱間:東西1.65m・南北1.65m	SD105と組み合う?	10
	SD105	S区	弧状。上幅1.8~2.2m・深さ20~30cm。壁面・底面は凹凸あり。	SB116に付属する溝跡か。	10
	SD110	S区	弧状。上幅55~75cm・深さ6~20cm。壁面・底面は凹凸あり。	SD114より新。	13
周溝状遺構	SD114	S区	弧状。上幅90~150cm・深さ5~12cm。壁面・底面は凹凸あり。	SD110とはば重複。	13
	SD102	S区	南北方向。検出長13.5m・上幅100~190cm・深さ45cm。	上部に灰白色火山灰ブロック。	6~13
溝跡	SD103	S区	東西南方向。上幅35~50cm・深さ15cm。	浅い小溝跡。SI109より新。	10
	SD106	S区	南北方向。検出長2.9m・上幅30cm・深さ5~6cm。	浅い小溝跡。	10
	SD111	S区	東西南方向。上幅30cm・深さ10cm。	浅い小溝跡。SD102より古。	13
（周溝状除く）	SD112	S区	東西方向。上幅20cm・深さ10cm。	浅い小溝跡。SK101より古。	13
	SD115	S区	弧状か。上幅90~150cm・深さ15~20cm。壁面・底面は凹凸あり。	SD109掘り方理下で確認。	8
	SD118	N区	東西方向。上幅60~75cm・深さ10cm。断面形:浅いV字形。		6~16
土壙	SD119	N区	東西方向。上幅45~60cm・深さ5~8cm。断面形:浅いV字形。		6~16
	SK101	S区	丸扇形状。長軸80cm・短軸70cm・深さ35cm。	炭化物・焼土の薄層あり。	13
	SK113	S区	平面形不明。深さ30cm。	調査区南壁際で検出。	13
その他	SX117	S区	平面形不明。土壙状の落ち込み。調査区東壁際で上幅2.5m・深さ30cm。	SI109側り方理下で確認。	10

2) 遺構と遺物

〈S区〉

A. 竪穴住居跡

【SI108】(第8図・第9図、図版3-1~4)

S区南に位置し、調査区外へと延びている。SI109住居跡と重複し、これよりも古い。

【平面形・規模】全般的な平面形や規模は不明であるが、東西3m以上、南北3m以上の方形状を呈するとみられる。

【方向】北辺でみると東で北へ約16°偏する。

【壁】床面からやや斜めに立ち上がっていている。壁高は残りが悪く、北壁では床面から5~10cmほどである。

【床面】住居掘り方理下を床面としており、ほぼ平坦である。北側には楕円形状の焼面(長軸30cm×短軸15cm)があり、付近には炭化物粒や焼土ブロックを含む薄層が分布していた。

【柱穴】主柱穴とみられる2個(P2・P3)を検出した。本来は住居平面形の対角線上に4個配置されていたものとみられる。P2は長軸34cm・短軸27cmの隅丸方形状で、深さは38cm、P3は径約30cmの円形状で、深さは約15cm、いずれも柱痕跡は不明である。

ほかにP4がある。径約25cmの円形状で、深さは約50cm、柱痕跡は不明である。埋土には焼土ブ

ロックが多く含まれている。

〔カマド〕 カマドは不明である。

〔周溝〕 西辺・北辺とも認められなかった。

〔その他〕 東壁際に小土塹（K1）、P2の近くに浅いピット（P1）が認められた。K1は長軸55cmほどの大きさで、深さは約15cmである。堆積土は焼上ブロックを含む暗灰黄色～暗オリーブ褐色粘土質シルトの自然堆積土である。P1は径35cmほどの円形状で、深さは5cmと浅い。堆積土は焼土ブロックを多く含んでいる。

〔堆積土〕 2層に大別される。炭化物粒を含む暗灰黄色粘土質シルトを主体とした自然堆積土である。

〔出土遺物〕 住居床面からロクロ調整の土師器壺、K1から非ロクロ調整の土師器壺（第9図-3）、須恵器壺、住居堆積土から須恵器壺（第9図-4・5）・蓋、土師器壺、住居掘り方埋土から不明鉄製品（第9図-6）などが出土している。また、P4からロクロ調整の土師器壺（第9図-1・2）が出土している。

【SI109】（第8図・第9図、図版3-1~4）

S区南に位置し、調査区外へと延びている。

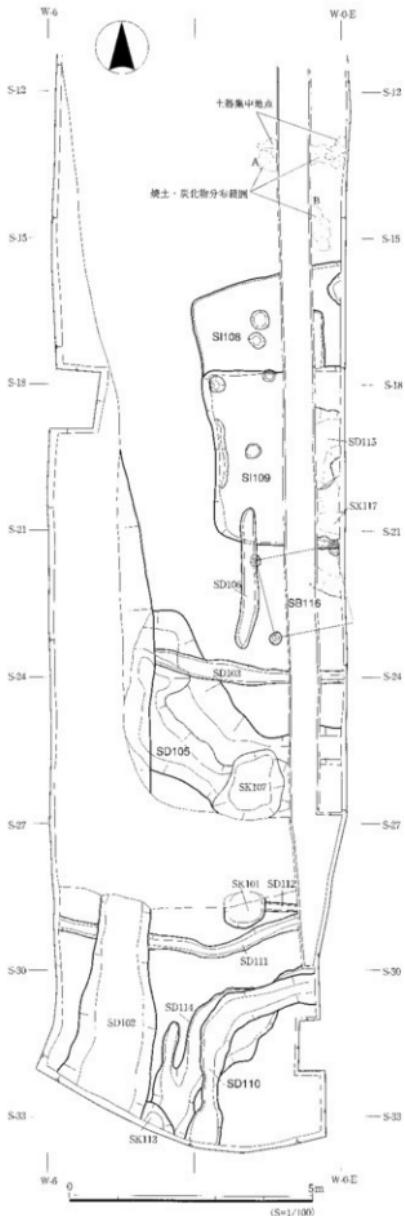
SI108住居跡、SB116掘立柱建物跡、SD106溝跡、SD115溝状構造、SX117不明遺構と重複し、SI108、SB116、SD115、SX117よりも新しくSD106よりも古い。

〔平面形・規模〕 全体的な平面形や規模は不明であるが、東西3m以上、南北3.5mの方形状を呈するとみられる。

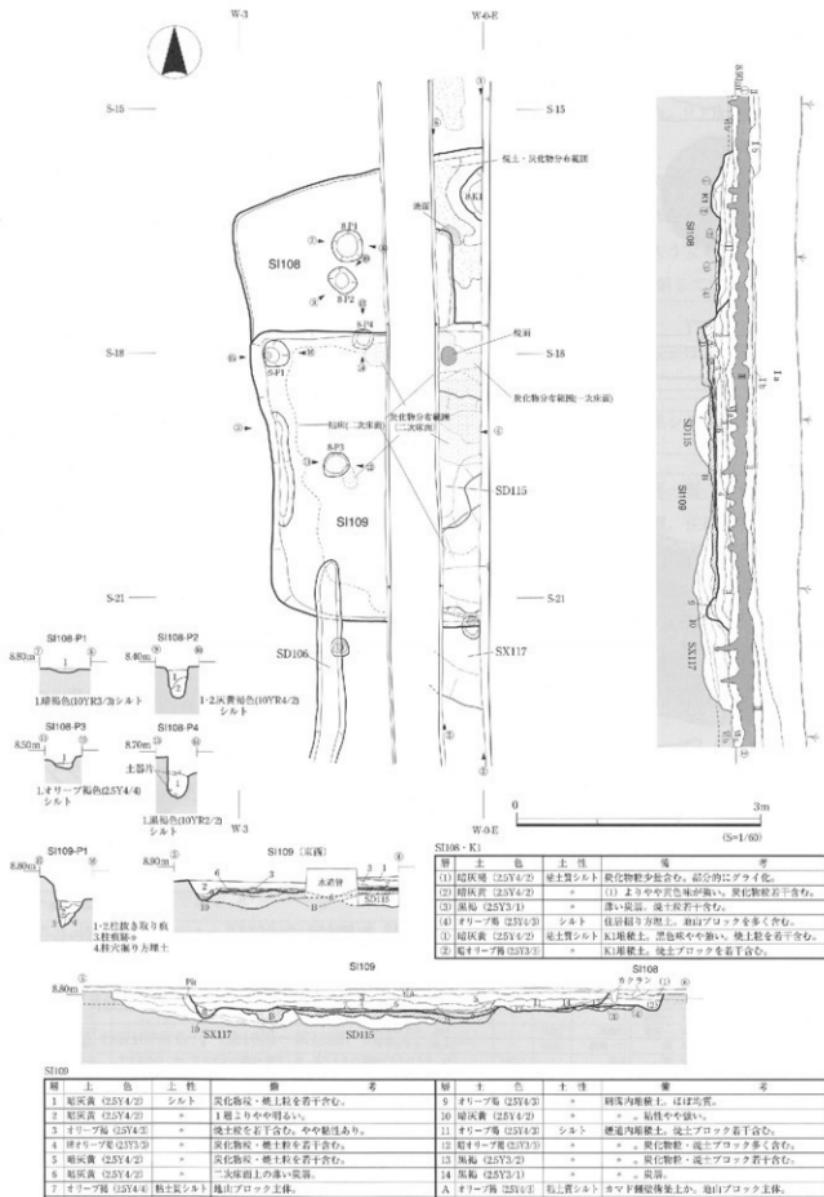
〔方向〕 西辺でみると北で西へ約6°偏する。

〔壁〕 床面からやや斜めに立ち上がっている。壁高は西壁では床面から10~15cmほどである。

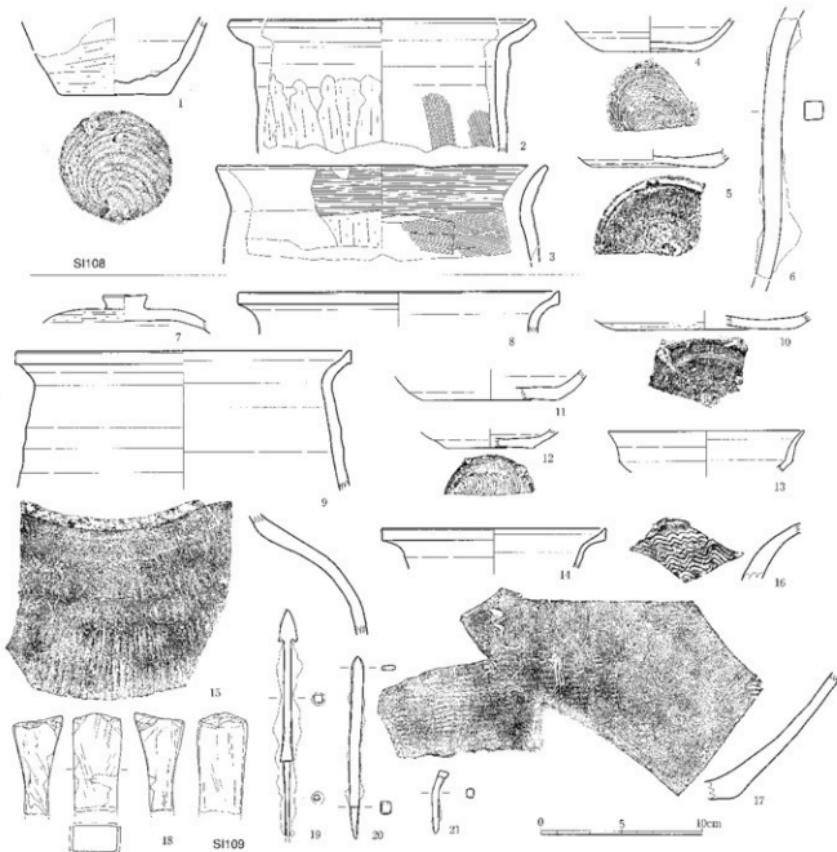
〔床面〕 一度貼り床がなされており、一次床面と二次床面が認められる。一次床面は住居掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。二



第7図 S区南の遺構



第8図 SI108・SI109駆空住居跡



No.	器種	遺構/船	残存	大きさ	測量 (cm)	特徴	参考文献
1	上部器 鋏	SI108 P4	胸・腹部	-	6.6	鈎: ヘラカズリ 鋏: 扇形鋏切刃 内: ロクロナヂ	10-1 36
2	十輪器 鋏	SI108 P4	口・側溝	(18.6)	-	外: ロクロナヂ(扇形鋏切刃)→ヘタケヌイ 内: (L)コロナヂ(扇)ロクロナヂ→ヘタケ	10-2 35
3	上部器 鋏	SI108 K1	口・側溝	(30.2)	-	外: (L)コロナヂ(扇)ヘラカズリ 内: (L)コロナヂ(扇)ヘタケヌイ	10-3 34
4	頂部器 环	SI108 鍋	丸鉢	-	(5.6)	内外: コロナヂ(扇)ヘラカズリ	10-4 31
5	頂部器 环	SI108 鍋	底鉢	-	(7.6)	内外: コロナヂ(扇)ヘラカズリ→チヂ	10-5 32
6	小明鏡 製品	SI106 極方土壙	残存長16.2cm×幅12cm×厚さ2cm	-	-	内: ロクロナヂ(扇)ヘラカズリ→チヂ	10-6 34
7	土器器 鋏	SI109 一次板	1/6	-	-	外: ロクロナヂ(扇)ヘラカズリ 内: ロクロナヂ	10-7 36
8	土器器 鋏	SI109 一次板	1/6	-	-	内: ロクロナヂ	10-7 41
9	土器器 鋏	SI109 帆	口・側部	(20.6)	-	内: ロクロナヂ	10-8 45
10	帆山器 环	SI109 鍋	底鉢	-	(11.0)	外: ロクロナヂ(扇)ヘラカズリ(表: 不規則・圓形)ヘラカズリ 内: ロクロナヂ	10-9 44
11	帆山器 环	SI109 一次板	底鉢	-	(8.0)	内: ロクロナヂ(扇)ヘラカズリ→チヂ	10-10 40
12	帆山器 环	SI109 一次板	底鉢	-	(5.4)	内: ロクロナヂ(扇)ヘラカズリ	10-11 38
13	帆山器 高台环	SI109 一次板	口・側部	(12.0)	-	内: ロクロナヂ	10-12 47
14	帆山器 錐	SI109 一次板	口・側部	(13.0)	-	内: ロクロナヂ	10-13 39
15	帆山器 錐	SI109 側面片	解剖	-	-	外: 平行カタツムリ 内: 扇形アテ(テ)内: ナテ	10-14 37
16	帆山器 錐	SI109 鍋	口・側部	-	-	外: ロクロナヂ(扇)波紋状 内: ロクロナヂ	10-15 42
17	帆山器 錐	SI109 鍋	胸・腹部	-	-	外: 平行カタツムリ→ヘタケヌイ 内: ナテ	10-16 43
18	石斧	SI109 鍋	-	-	-	砂岩製 破存長6.0cm×幅3.0cm×厚さ1.5~3.0cm	10-17 64
19	石斧	SI109 鍋	-	-	-	砂岩製 破存長13.0cm×幅3.0cm×厚さ2.0cm(茎部) 20.0cm×幅3.0cm×厚さ2.0cm(頭部) 破損	10-18 319
20	石斧	SI109 一次板	-	-	-	砂岩製 破存長11.2cm×幅3.0cm×厚さ2.0cm(頭部) 20.0cm×幅3.0cm×厚さ2.0cm(頭部) 破損	10-19 318
21	砂鉄	SI109 一次板	-	-	-	砂岩製 破存長3.9cm×幅0.4cm×厚さ0.5cm 破損	10-20 316

第9図 SI108・SI109出土遺物

次床面は、壁際を除いて厚さ2~3cmほどのオリーブ褐色粘土質シルトを貼り付けている。一次・二次床面上ではカマド付近を中心に炭化物粒の分布が認められた。

【柱穴】主柱穴は検出されなかった。ただし、北西隅で柱穴を1個（P1）検出した。P1は径約30cmの円形状で、深さは約35cm、柱材は抜き取られている可能性がある。

【カマド】カマドは北辺に付設されている。燃焼部の一部と煙道が残存する。燃焼部は奥行きがおよそ50cmほどで、床面は浅く窪んでおり、径25cmほどの硬化した焼面が認められる。側壁は調査区東壁際で痕跡的に認められるが、オリーブ褐色シルトを貼り付けて構築しているようである。奥壁は住居壁面とほぼ対応する。煙道は奥壁から一旦やや低くなつてからゆるやかに傾斜してたち上がり、1.2mほど北へ延びている。

【周溝】西辺と南辺の中央付近で部分的に認められた。幅20~25cm、深さ12~15cmほどである。堆積土は暗灰黄色粘土質シルトなどを主体とした自然堆積土である。

【堆積土】2層に大別される。上半はオリーブ褐色シルト、下半は暗オリーブ褐色シルトを主体としている。いずれも自然堆積土である。

【出土遺物】住居一次床面から土師器蓋・壺（第9図-7・8）、須恵器壺・高台壺・壺（第9図-11～14）、鉄鎌・鉄釘（第9図-20・21）、住居二次床面から土師器壺、須恵器壺・壺、住居掘り方埋土から土師器壺・壺、須恵器壺・蓋・壺（第9図-15）、住居堆積土から土師器壺・壺（第9図-9）、須恵器壺・壺（第9図-10・16・17）、鉄鎌（第9図-19）、砥石（第9図-18）などが出土している。住居床面出土の土師器壺はロクロ調整で、須恵器壺は底部が回転糸切り・無調整のものがみられる。

B. 捩立柱建物跡

【SB116】（第10図、図版4-1）

S区南の調査区東壁際に位置する1間×1間と推定される擗立柱建物跡である。3個の柱穴（P1～P3）を検出した。南東隅柱は調査区外になる。SI109住居跡、SD106溝跡と重複し、これらよりも古い。

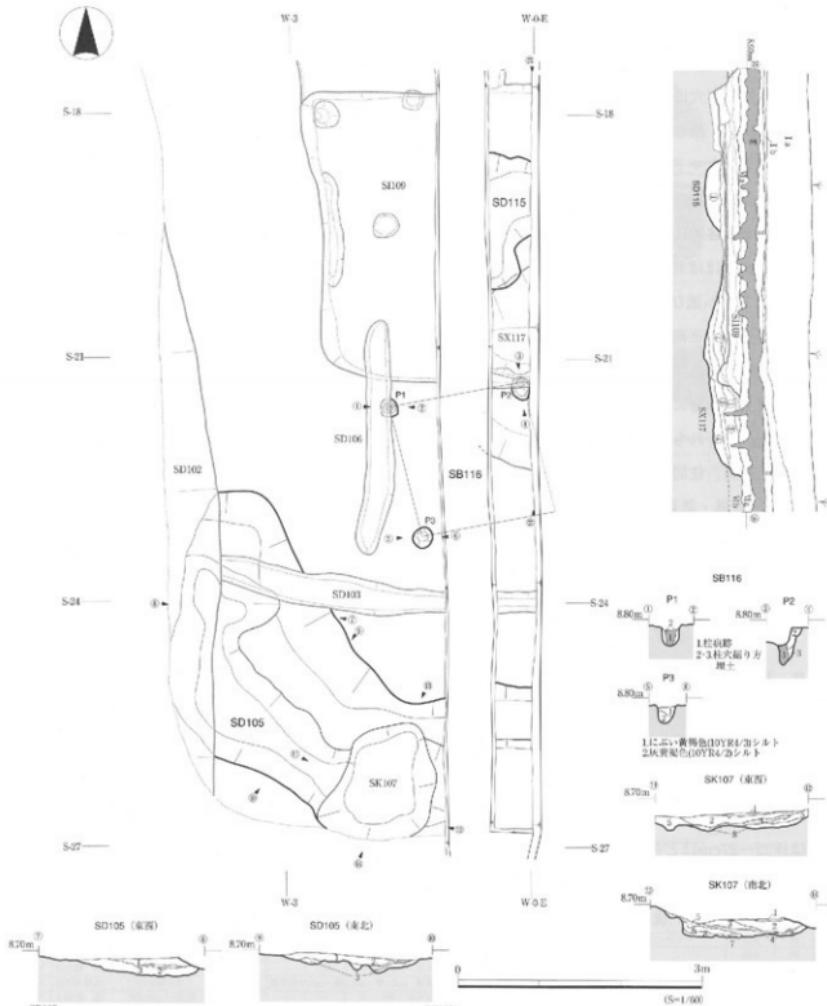
柱間寸法は東西1.65m・南北1.65mで、建物方向は西側柱列でみると北で西へ約15°偏する。柱穴は径22~27cmほどの円形状で、深さは25~45cmある。柱痕跡は2ヶ所（P1・P2）で認められ、径10~12cmほどの円形である。

この建物跡は、後述するSD105周溝状遺構（SD115も一連のものか）と関連する可能性がある。

C. 周溝状遺構

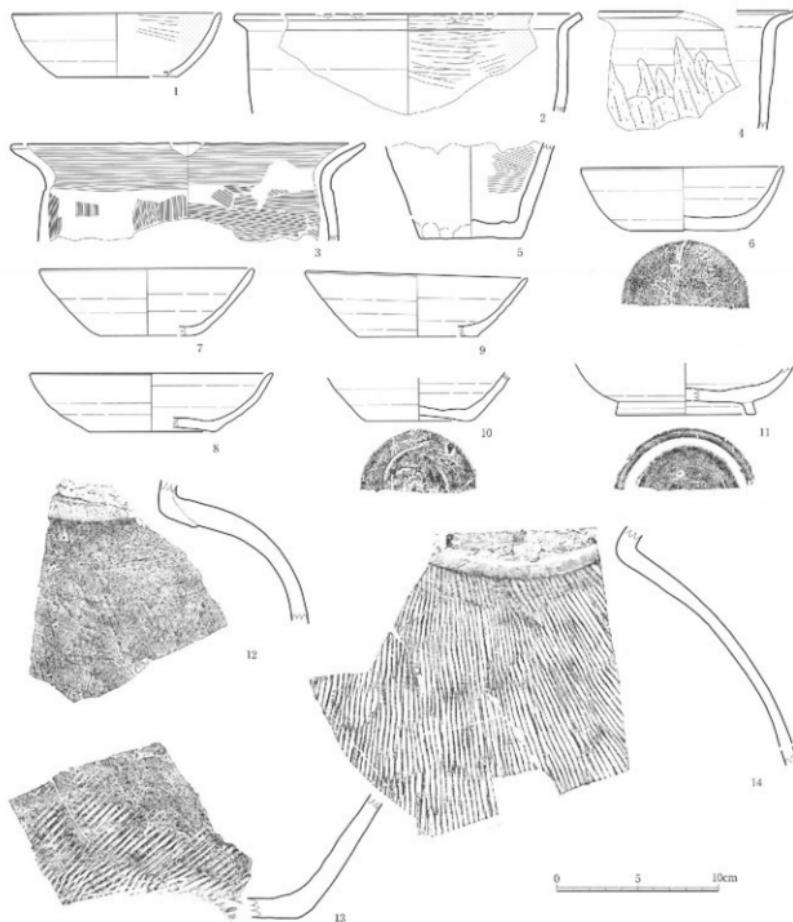
【SD105（SK107含む）】（第10図～第12図、図版4-2・3）

S区南に位置する弧状の溝跡である。中世のSD01溝跡に壊されているが、西端部はこれ以上西へは延びず、東側は調査区外へとさらに延びている。中央には土壤状に覆むSK107があるが、SD105とは一連のものである。また、位置関係からすると、SI109住居跡の下で検出されたSD115溝状遺構と組み合い、前述したようにSB116建物跡に付属する周溝状遺構になる可能性がある。SD102・SD103溝跡と重複し、これらよりも古い。



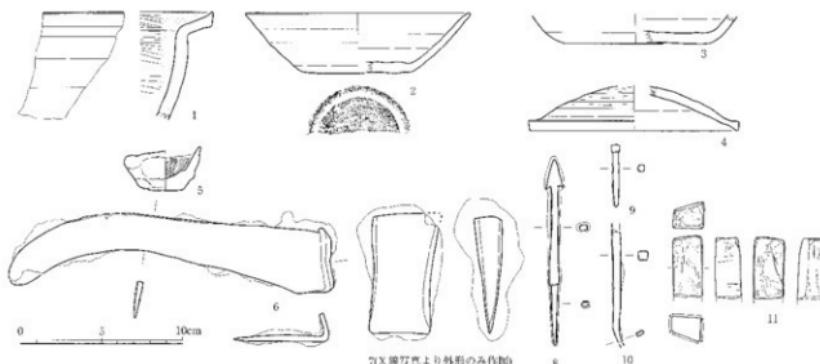
層	土色	土性	備考	層号
1 オリーブ褐 (2.5Y4/2)	シルト	やや赤色味あり。炭化物粒・鐵土粒を若干含む。		
2 黒褐 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	海苔灰層。		
3 黄褐 (2.5Y5/3)	シルト			
SD105				
層	土色	土性	備考	層号
① 硬灰質 (2.5Y4/2)	シルト	ほぼ青灰。		
② 硬灰質 (2.5Y4/2)	粘土質シルト	①よりやや暗い。		
③ オリーブ褐 (2.5Y4/2)	シルト	地山ブロックを若干含む。		
④ オリーブ褐 (2.5Y4/2)	*	泥炭を含む。地山ブロックを若干含む。		
SK107				
層	土色	土性	備考	層号
1 黒 (2.5Y2/1)	シルト	炭化物粒・鐵土粒を多く含む。		
2 黑褐 (2.5Y3/2)	粘土質シルト	泥炭・地山ブロックを若干含む。		
3 黄褐色 (2.5Y3/3)	*	*		
4 黄 (2.5Y2/1)	シルト	薄い炭痕。		
5 緩灰質 (2.5Y4/2)	粘土質シルト	炭化物粒・鐵土粒を若干含む。		
6 黄褐 (2.5Y5/3)	*	地山ブロックを多く含む。		
7 黄褐 (2.5Y5/3)	*	⑥層より黄色味あり。		
8 オリーブ褐 (2.5Y4/3)	*	地山ブロックを多く含む。		
SD115				
層	土色	土性	備考	層号
① 黄灰質 (2.5Y4/2)	粘土質シルト	炭化物・鐵土粒を多く含む。地山ブロックを多く含む。		

第10図 SB116掘立柱建物跡、SD105周溝状遺構・SD115溝状遺構



No.	器種	遺物番	残存	法算(cm)				特徴	写真図数	發見
				口	径	底	高			
1	土器盤 环	SD105 地1	1/5	(12.6)	(7.4)	4.0	-	外:ロクロナデ、内:輪印・不明・不均ハラタズリ、内:ヘラミガキ→白色選擇、褐色あり	10-17	22
2	土器盃 裂	SD105 地1	1/1-全体	(21.4)	-	-	-	外:ロクロナデ、内:ヘラミガキ→黑色	10-18	24
3	土器盃 林	SD105 地1	1/1-外品	(21.6)	-	-	-	外:ロコナデ(?)ハケメ、内:ロコナデ(?)ハケメ	10-19	14
4	土器盃 裂	SD105 地1	1/1-裏品	-	-	-	-	外:ロクロナデ・ハラケズリ、内:ロコナデ	10-20	36
5	土器盃 裂	SD105 地1	柄・底部	6.2	-	-	-	外:オサニ、内:ナデ、内表面が黒い	10-21	22
6	破壊盤 环	SD105 地1	1/2	(12.4)	6.4	3.9	-	内:ロコナデ、底:泥堅不均・ナデ	10-23	19
7	破壊盤 环	SD105 地1	1/3	(13.0)	(5.8)	4.2	-	内:ロコナデ、底:泥堅系切り	10-22	8
8	破壊盤 环	SD105 地1	1/1	(14.8)	(7.6)	3.7	-	内:ロコナデ、底:泥堅系切り	10-24	18
9	破壊盤 环	SD105 地1	1/3	(13.6)	(7.4)	4.1	-	内:ロコナデ、底:泥堅不均→側板へハラタズリ	10-25	16
10	破壊盤 杯	SD105 地1	体・底部	-	6.4	-	-	内:ロコナデ、底:シラムカ	11-1	17
11	亂毛器 高台环	SD105 地1	体・高台	-	(8.4)	-	-	内:ロコナデ、底:ヘラミガキ→高台接合後ロクロナデ	11-2	12
12	亂毛器 両	SD105 地1	質部	-	-	-	-	外:平行タキツヅリ、内:輪文で真・ナデ	11-3	29
13	亂毛器 裂	SD105 地1	脚・底	-	-	-	-	外:平行タキツヅリ、内:無文アリ且・脚部ナデ	11-4	21
14	亂毛器 裂	SD105 地1	肩部	-	-	-	-	外:平行タキツヅリ、脚部ナデ、内:無文アリ且・脚部ナデ	11-5	9

第11図 SD105出土遺物(1)



(X線写真より外観のみ作図)

No.	器種	遺構/層	現存	法面積 (cm ²)		特徴	写真図版	表紙
				口徑	底径			
1 上部器 鉢	SK107	堆1~3	口一休添	—	—	内:クロナデ 内:ヘラミガキ→黒色処理	11.6	27
2 須恵器 壺	SK107	堆1~3	1/2	(12.8)	7.0	3.8 内外:クロナデ 底:回転糸切り	11.7	26
3 須恵器 壺	SK107	堆6~8	第一組成	—	(8.8)	— 内外:クロナデ 底:回転糸切り	11.6	29
4 須恵器 壺	SK107	堆4	1/5	(12.8)	—	— 内:クロナデ 頂部:ハケヅリ 内:クロナデ	11.9	30
5 手捏土器	SK107	堆1	4/5	4.5	2.9	2.7 内:ナゲナガオホ 内:ヘラナゲナゲ	11.20	25
6 鉄鎌	SD105	堆1	—	残存約21.0cm × 幅約4.0cm × 厚約0.2cm	—	—	14.10	図12
7 鉄斧	SD105	堆1	—	残存約7.2cm × 幅約5.0cm × 厚約4.0cm × 厚約1.7cm	—	X線写真で実測	14.11	図9
8 鉄鎌	SD105	堆2	—	残存約11.5cm × 幅約4.0cm × 厚約4.0cm × 厚約4.0cm	—	—	14.12	図11
9 鐵釘	SD105	堆1	—	残存長5.8cm × 幅0.6cm × 厚0.6cm	—	表面無加工	14.6	図9
10 鐵釘	SD105	堆1	—	残存長7.0cm × 幅0.2~0.6cm × 厚0.6cm	—	表面無加工	14.7	図10
11 砥石	SD105	堆2	—	砂岩質 残存長3.5cm × 厚1.9cm × 厚1.6cm	—	—	14.15	図3

第12図 SD105・SK107出土遺物 (2)

規模は上幅1.8~2.2m・下幅1.0~1.5m、深さ20~30cmほどであるが、輪郭には広狭があり、壁面や底面にも凹凸がある。断面は浅い不整な皿状を呈する。堆積土は3層に大別できる。オリーブ褐色シリトや黄褐色シリトを主体にした自然堆積土で、中位には炭化物粒を多量に含んだ厚さ1~2cmほどの薄層が認められる。

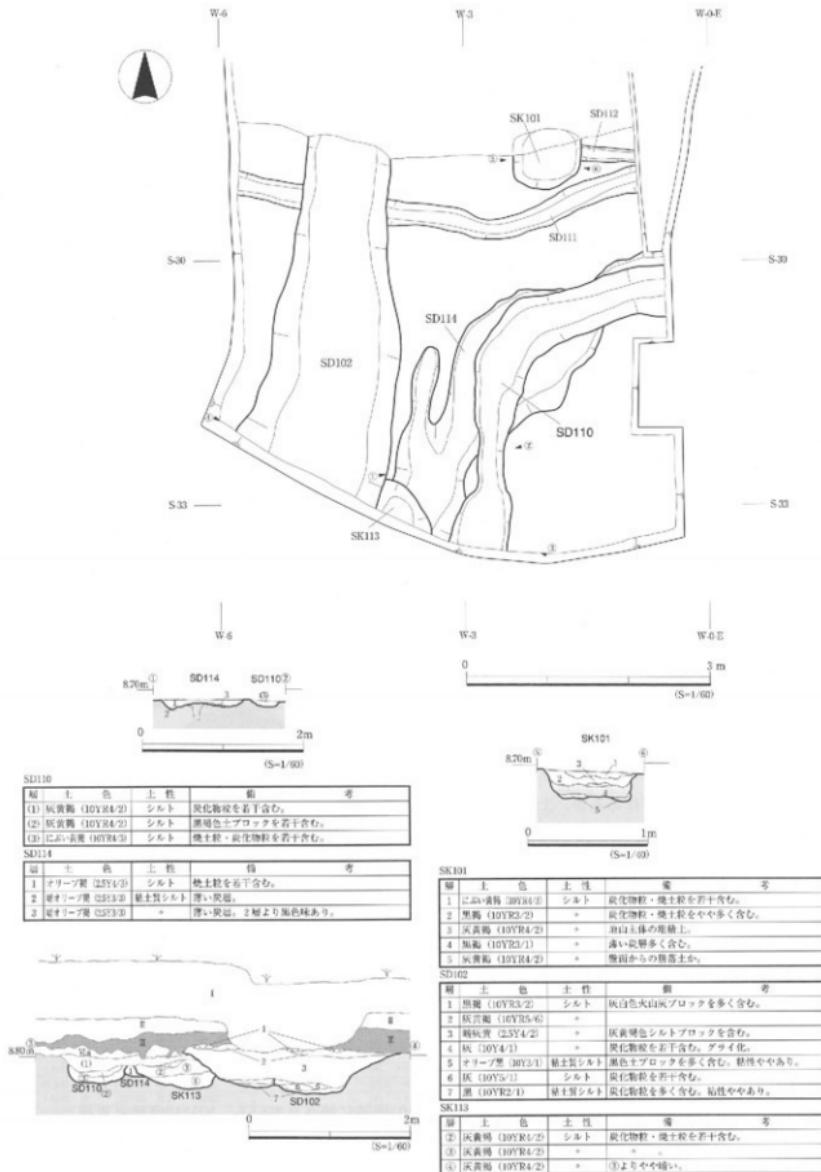
遺物は比較的多く出土しており、堆積土上半を中心とし、土師器壺・鉢・壺・手捏土器（第11図-1~5、第12図-1~5）、須恵器壺・高台壺・壺・壺・壺（第11図-6~14、第12図-2~4）、鉄鎌・鉄斧・鉄釘（第12図-6~10）、砥石（第12図-11）などが出土している。須恵器壺には底部が回転ヘラ切りや回転糸切り・無調整のものがみられる。

【SD110】（第13図・第14図、図版2~3）

S区の南東隅に位置する弧状の溝跡である。両端とも調査区外へ延びている。SD114周溝状造構と重複し、これよりも新しい。

規模は上幅55~75cm・下幅20~50cm、深さ6~20cmほどである。輪郭はやや不規則で、壁面や底面にもやや凹凸があり一定していない。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は1層で、灰黄褐色シリトを主体にした自然堆積土である。

遺物は堆積土から土師器壺・壺（第14図-1~3）や須恵器壺・壺・壺などの小片が少量と鉄釘（第14図-4）が出土している。



第13図 SD110・SD114周溝状遺構、SK101土壤、SD102溝跡ほか

【SD114】（第13図・第14図、図版2-4）

S区の南東隅に位置する弧状の溝跡で、前述のSD110周溝状遺構とほぼ重複する。SD110、SK113土壌よりも古い。

規模は上幅90~150cm・下幅55~115cm、深さ5~12cmほどである。輪郭は不規則で、壁面や底面には凹凸があり、SD110と同様に一定していない。断面形は浅い不整な皿状を呈する。堆積土はオリーブ褐色シルトを主体にした自然堆積土であるが、底面付近には炭化物・焼上粒を含んだ薄層が部分的に認められる。

遺物は堆積土から土師器壺・甕（第14図-5）、須恵器壺・蓋・甕などの小片が少量出土している。

D. 溝跡・溝状遺構（周溝状のものを除く）

【SD102】（第13図・第14図、図版2-1・3）

S区南の西側に位置する南北方向の溝跡である。北部分は中世のSD01とほぼ重複しており、これに壊されている。SD111溝跡、SK113土壌と重複し、これよりも新しい。

検出長は13.5mで、上幅100~190cm・下幅70~115cm、深さは45cm（調査区西壁）ほどある。断面形は不整な皿状を呈する。溝跡の底面付近には灰色～オリーブ黒色粘土質シルトが薄く、中位には暗灰黄色シルトがやや厚く堆積している。また、上部には灰白色火山灰がブロック状にわずかに認められる。

遺物は底面や堆積土から土師器甕（第14図-7）、須恵器壺（第14図-6）・甕の小片、鉄製品などが若干数出土している。

【SD115】（第10図、図版3-4）

S区のSI109住居跡の下で検出した。部分的な確認のため不明な点が多いが、西端は現水道管の下で立ち上がり、それ以上西へは延びていないようである。遺構の形状や位置関係からすると、SD105周溝状遺構と組み合う可能性がある。

平面形は不整形ではあるが、上幅90~150cm・下幅50~65cm、深さ15~20cmほどある。底面や壁面にはやや凹凸がある。堆積土は暗灰黄色粘土質シルトで、地山ブロックを含む。

遺物は堆積土から土師器甕腹部片が出土したのみである。

【その他】これらの他に、S区南では東西・南北方向の小溝跡が4条（SD103・SD106・SD111・SD112）検出されている。上幅は20~30cmほどで、深さはいずれも10~20cmと浅い。遺物は、土師器や須恵器の小片が少量出土しているのみである。

E. 土壌

【SK101】（第13図・第14図、図版4-4）

S区南に位置する上層である。北半を中世のSD01溝跡に壊されている。SD112溝跡と重複し、これよりも新しい。

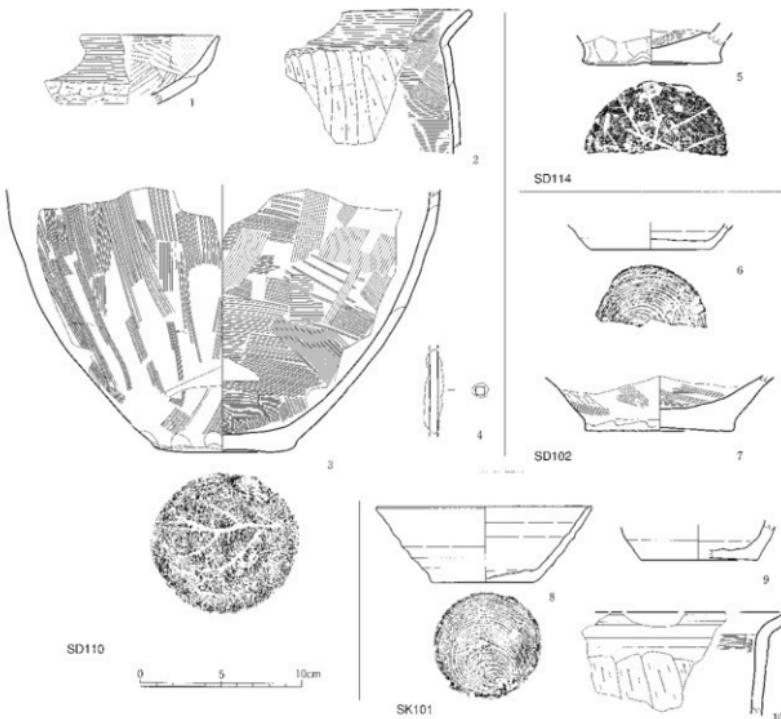
平面形は隅丸方形状で、長軸80cm・短軸70cmほどの大きさである。深さは約35cmあり、断面形は

箱形を呈する。堆積上は5層に細分でき、灰黄褐色シルトや黒褐色シルトなどを主体とするが、中位には炭化物・焼土粒を含む薄層がみられる。いずれも自然堆積土である。

遺物は堆積土上半から土師器鉢・甕（第14図-9・10）、須恵器坏（第14図-8）・高台坏・蓋などが出土している。須恵器坏は底部が回転糸切り・無調整のものである。

【SK113】（第13図）

S区の調査区南壁際にかかっている土塙である。SD102溝跡、SD114周溝状造構と重複し、SD102



No.	器種	構造・層	材質	法量(cm)	特徴	参考圖	食性		
1	土器	SD110 壁	口・底部	-	-	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヘラミガキ→黑色施塗	11-11	50	
2	土器	SD110 壁	LJ・腹部	-	-	外：(口)ヨコナデ (腹)ヘラケズリ 内：(口)ヨコナデ (腹)ヘラチテ	11-12	45	
3	土器	SD110 壁	胴・底部	87	-	外：ハケメ・底部付造オサエ 施：木葉模 内：ハケメ→ナダ	11-13	40	
4	土器	SD110 壁	底5.2cm×幅0.5cm×厚0.5cm	-	-	-	14-8	純33	
5	土器	SD114 壁	底部	-	(85)	内：ナデ/オサエ 施：木葉模 例成画測面「X」 内：ヘラナデ	11-14	52	
6	土器	SD102 壁	腹部	-	(74)	内：リカリナデ 施：輪軸網切り	11-15	5	
7	土器	SD102 底面	底部	-	(9.0)	外：ヘラケズリ→ナダ 施：木葉模 内：ナダ	11-16	4	
8	須恵器	SK101 地1~3	2~3	13.2	6.2	4.7	内：ロクロナデ 施：輪軸網切り	11-17	1
9	須恵器	SK101 地1~3	底部	-	(7.0)	内：ロクロナデ 施：回転糸切り	11-18	5	
10	土器	SK101 壁1~3	LJ・側面	-	-	外：(口)ヨコナデ (腹)ヘラケズリ 内：(口)ロクロナデ (腹)ヘラチテ	11-19	2	

第14図 SD110・SD114、SD102、SK101出土遺物

より古く、SD114よりも新しい。

平面形や大きさなどは不明であるが、深さは30cmほどある。堆積土は灰黄褐色シルトを主体とした自然堆積土である。

遺物は土師器壺の底部片が出土している。



No.	器種	遺産／層	残存	底径／高さ	底面積 (cm)	特徴	写真図版	登録
1ab	土師器 壺	十郎集中地点	2/5	25.2 / 5.8	—	内：平行テクスチャ→ロクロナデ・裏丁型) ヘラケズリ 外：ロクロナデ→チヂ・ヘナデ外壁面凹凸	12.1ab	53
2	土師器 壺	土器集中地点	1/5	23.4	—	外：(T1) ロクロナデ (脚) ロクロナーナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	12.2	54
3	土師器 壺	上善集中地点	1/3	7.2	—	外：(D6) ロクロナデ→ヘラケズリ (崩壊) 内：ロクロナデ→凹起ハタメ→ヘナナデ	12.3	55

第15図 土器集中地点の遺物

F. 不明遺構ほか

【SX117】(第10図、図版3-4)

S区のSI109住居跡・SB116建物跡の下で検出した性格不明の遺構である。土壤状に落ち込んでおり、現水道管下で立ち上っている。調査区東壁にかかっている部分の幅は約2.5m、深さは約30cmほどである。堆積土は暗灰黄色シルトを主体とするが、底面近くには炭化物の薄層（厚さ1~2cm）が認められる。いずれも自然堆積土である。

遺物は底面近くの炭化物層から土師器壺断部が若干数出上している。

【焼上・炭化物分布地点、土器集中地点】(第7図・第15図、図版5-2)

S区のSI108住居跡の北側に近接して焼土ブロック・炭化物粒の分布（A・B）や土器集中地点が認められた。土器集中地点からはロクロ調整の土師器壺（第15図-1~3）などがまとまって出土した。

N区

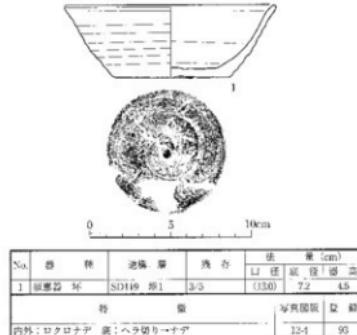
A. 溝跡 (第6図・第16図)

N区では東西方向の上幅50~70cmほどの小溝跡が2条（SD118・SD119）検出されたのみである。いずれも深さ5~10cmと浅く、断面形は皿状を呈する。北端部のSD119からは須恵器壺（第16図-1）が出土している。

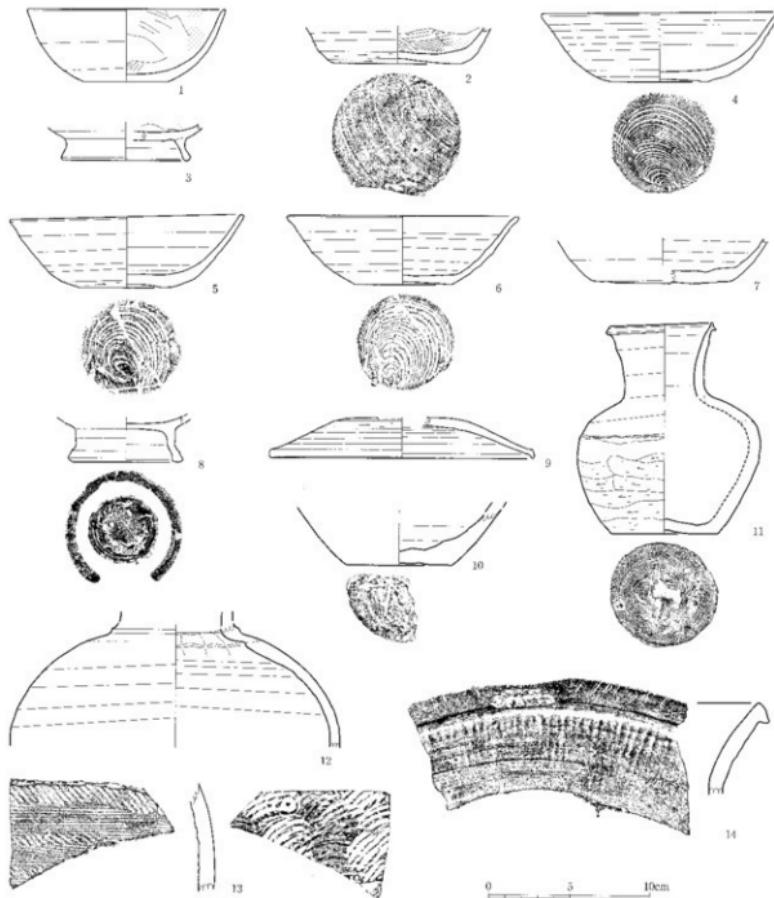
《その他の出土遺物》 (第17図・第18図、図版12~14)

S区南半部のSD105周溝状遺構やSI108・SI109住居跡付近のVI層から比較的多くの遺物が出土しているが、S区北半部よりN区までの北側区域ではほとんど出土していない。

前述の出土遺物以外には、土師器壺・鉢・甕（第17図-1~3、第18図-4~7）、須恵器壺・高台壺・蓋・鉢・壺・長頸壺・平瓶・甕（第17図-4~14、第18図-1~2）、転用硯（第18図-3）、刀子・鉄鎌・鉄斧（第18図-8~10）、石製紡錘車（第18図-11）、砥石などがある。第17図-2のロクロ調整の土師器壺は、底部が静止系切りである。第18図-3は内面が平滑で、高台壺を転用した硯とみられる。第17図-1の須恵器壺はほぼ完形である。



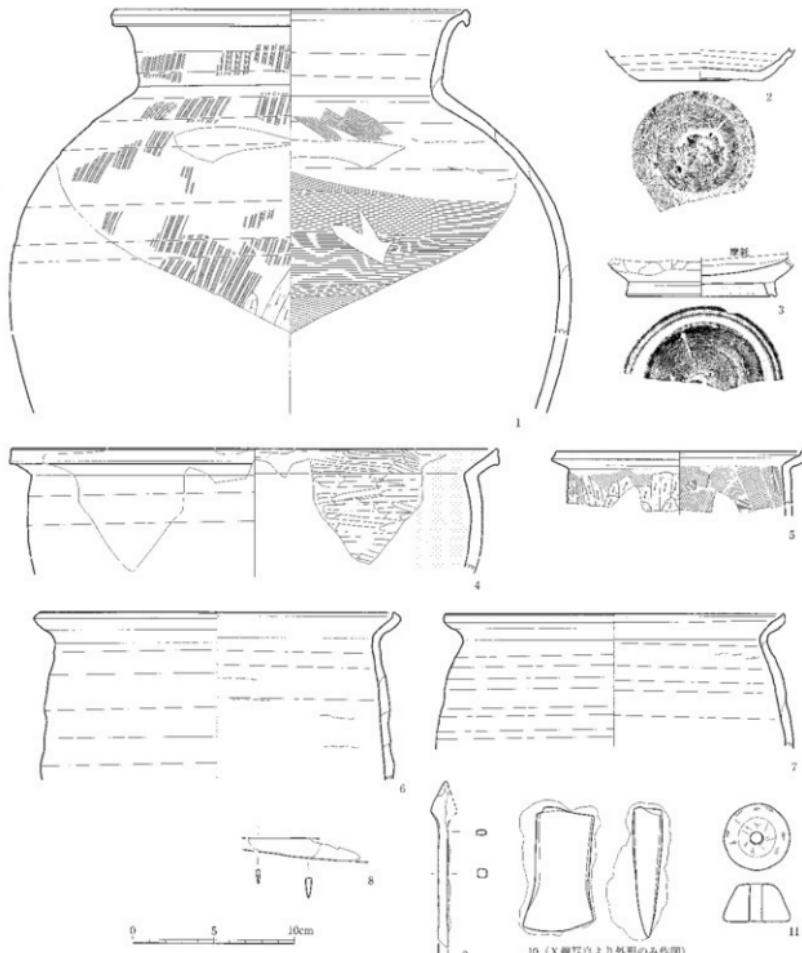
第16図 SD118・SD119溝跡とSD119出土遺物



0 5 10cm

No.	器種	直徑/周	高さ	底径	底高	法量(cm)	特徴	写真図版	説
1	土師器 环	VI層	1/6	12.2	(5.2)	4.5	外:ロクロナデ 内:圓筒形切り 内:ヘラミガキ→黑色施錆	125	89
2	土師器 环	瓦層	1/4	-	7.8	-	外:ロクロナデ(下部)内:輪状カズレ 壁:垂直面切り 内:ヘラミガキ→黑色施錆	126	75
3	土師器 高台器	瓦層	-	-	(8.0)	-	内壳:ロクロナデ 内:ハマヨリ+黑色施錆 壁:垂直面不規則な浮き造り内:ロクロナデ, 施錆薄い	127	91
4	土師器 环	VI層	1/4は定形	14.7	0.1	4.2	内外:ロクロナデ 底:圓筒形切り	128	58
5	須恵器 环	瓦層	1/5	14.4	0.0	4.0	外:ロクロナデ+小輪+ハラタエリ 底:圓筒形切り 内:ロクロナデ	129	66
6	須恵器 环	瓦層	1/2	(14.2)	6.0	4.3	内外:ロクロナデ 底:圓筒形切り	134	85
7	須恵器 环	VI層	1/6	-	(8.6)	-	外:ロクロナデ 底:ヘラ切り→輪状ナデ	132	67
8	須恵器 高台器	瓦層	-	-	(7.0)	-	外:ロクロナデ 底:圓筒形切り+高台造合後ロクロナデ	133	87
9	須恵器 环	VI層	1/4	(16.2)	-	-	外:ロクロナデ+輪状カズレ 内:ロクロナデ	134	70
10	須恵器 环	瓦層	-	-	(6.6)	-	外:ロクロナデ 底:圓筒形 有施錆 壁:邊縁前斜め「太」字 内:ロクロナデ	135	71
11	須恵器 环	瓦層	變形	6.7	6.6	12.8	外:ロクロナデ+輪状カズレ 棒台模あり 壁:切削し不規則+圓筒カズレ 内:ロクロナデ	136	37
12	須恵器 長颈器	瓦層	1/3	-	-	-	内外:ロクロナデ	137	74
13	須恵器 环	瓦層	-	-	-	-	外:平ガタクナデ+ハメ状工具による痕跡 内:円筒状内丸	138	86
14	須恵器 环	瓦層	口縁部	-	-	-	内外:ロクロナデ	139	73

第17図 VI層、その他の出土遺物(1)



第18図 VI層、その他の出土遺物(2)

No.	器種	遺構/器	残存	法寸	幅	高	厚	器	写真圖版	登録
			口	底	径	深	厚	式		
1	縦沿器	突	W型	1/6	(22.0)	-	-	外: 甲板タキ→ロクロナデ→手持もケズリ 内: ロクロナデ→チヂ	13-12	92
2	縦沿器	片	連接縫合部	1/3	-	7.6	-	内: ロクロナデ 戻: ハラ切り→斜レナダ	13-10	61
3	縦沿器	瓶形	連接縫合部	-	-	0.5	-	内: ロクロナデ 戻: ハラ切り→両面溶接合後ロクロナデ	13-11	79
4	十輪器	片	連接縫合部	口~体部	-	C300	-	外: ロクロナデ 内: ハラミガキ→黒色処理	13-14	80
5	土師器	瓶	連接縫合部	口~瓶部	(15.8)	-	-	外: ロクロナデ→斜いナデ→ケズリ 内: ロクロナデ→斜いナデ	13-15	63
6	土師器	突	連接縫合部	口~瓶部	(22.5)	-	-	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	13-13	65
7	十輪器	突	SODI 25mm	口~瓶部	(21.0)	-	-	内: ロクロナデ	13-16	82
8	刀子	V型	-	-	-	-	-	残存長4.8cm、幅1.2cm、厚0.2~0.4cm	14-9	登録
9	鉈	連接縫合部	-	-	-	-	-	素面 鋸歯: 扇形鋸歯、刃面溝筋: 斜起立溝、内芯引出: 引き出し棒 (1.7g) 刃面: 磨耗	14-3	登録
10	貝殻	連接縫合部	-	-	-	-	-	残存長7.6cm、刃部幅4.4cm、英脚3.6×1.5cm、大深刃凸で東洋	14-12	登録
11	石製劫錐	突	W型	-	-	-	-	厚口石、正面42cm、後面2.3cm、厚2.3cm、孔径3.2cm、重量54g	14-14	石1

(2) 中世

1) 検出状況（第19図、図版5～9）

古代と同様に、微地形的にはS区南側がやや高く、N区北側へ向かって徐々に高度を下げている。中世期の堆積層とみられるⅢ層は、S区南とV区北ではその高低差が40～50cmほどある。遺構はS区からN区まで認められるが、遺構の分布を大きく捉えれば大溝で区画された区域が少なくとも2ヶ所含まれていることが分かる。

S区は大溝で区画された西辺城にはほぼ相当するが、柱穴列1条と土壙12基などが検出されたのみである。また、N区では中央部に大溝で区画された区域の南西隅がかかっているが、その内側には土壙3基と井戸跡1基が分布する。この区画の外にあたる南側では井戸跡2基、北側では井戸跡1基、土壙1基などが点在する。

第2表 中世遺構一覧

造構種類	遺構No.	地区	特徴		図
			形・状・規・模・ほか	指・考	
区画溝跡	SD01	S区	上幅2.5m・深さ75～80cm。底面:U字形。SD10と連結。	-筋文塗、逆井文塗など出土。	20
	SD10	S区	上幅1.5m～1.6m・深さ65～70cm。断面:U字形。SD01と連結。	SD12より新、SD11より古。	21
	SD17	N区	上幅3.5m・深さ1.4～1.5m。断面:U字形。SD23と連結か。		23
	SD23	N区	上幅3.8m・深さ1.4～1.5m。断面:U字形。SD17と連結か。	灰鈍小頭など出土。	24
溝跡 (区画溝跡除く)	SD02	S区	東西方向。上幅3.5m・深さ50～85cm。断面:U字形。	SD01よりも古。	20
	SD11	S区	東西方向。上幅60～80cm・深さ15～20cm。断面:U字形。		21
	SD12	S区	東西方向。上幅60cm以上・深さ30cm。断面:U字形。	SD10区画溝跡より古。	21
	SD18	N区	北西～南北方向。深さ40～50cm。断面:逆台形状。	SD17より古。	23
	SD24	N区	南北～北東方向。上幅1.5m・深さ70cm。断面:逆台形状。	SD23よりも古？	24
	SD25	N区	南北～北東方向。上幅1.0m・深さ30cm。断面:逆台形状。		24
	SD30	N区	東西方向か。規模不明。	調査区北西端にあり。	19
柱穴列	SA05	S区	横長65cm、P2-P3約21cm。方向:北で西へ約3°傾する。	掘立柱建物跡の一剖か？	20
井戸跡	SE14	N区	素掘り。円形:径110cm。深さ90cm以上。断面:漏斗形。		26
	SE15	N区	素掘り。円形:径160cm。深さ130cm以上。断面:漏斗形。		26
	SE19	N区	素掘り。円形:径110cm。深さ80cm。断面:円筒形。		26
	SE20	N区	素掘り。今冬形。大きさは不明。	調査区東端際にあり。	23
	SE27	N区	素掘り。円形:径180cm。深さ90cm。断面:不整なU字形。		24
土壙	SK03	S区	横円形状。長軸190cm・短軸110cm。深さ20～25cm。断面:圓形。自然堆積土。		20
	SK04	S区	圓丸形形状か。短軸140cm。深さ30～35cm。断面:深いU字形。	自然堆積土。	21
	SK06	S区	圓丸形形状。長軸90cm・短軸75cm。深さ30cm。断面:U字形。	下部は人為的埋土。	21
	SK07	S区	楕円～圓丸形形状。長軸10cm・短軸80cm。深さ35cm。断面:漏斗形。	下部は人為的埋土。	21
	SK08	S区	圓丸形形状。一边110cm。深さ40cm。断面:漏斗形。	下部は人為的埋土。	21
	SK09	S区	圓丸形形状。一边25cm。深さ20～25cm。断面:盤状。	人為的埋土。	21
	SK13	S区	四形状。径45cm。深さ10cm。断面:直状。	自然堆積土。	21
	SK16	N区	円形。径55cm。深さ15cm。断面:直状。	自然堆積土。	26
	SK21	N区	圓丸形形状。底径330cm・短軸110cm。深さ40～45cm。初輪断面:U字形。	自然堆積土。	23
	SK22	N区	圓丸形形状か。深さ40cm。	自然堆積土。	23
	SK26	N区	椭円形状。長軸140cm・短軸90cm。深さ20～25cm。断面:不整な漏斗形。	人為的埋土。ウマ歯片出土。	21
	SK28	N区	不整円形状。径80cm。深さ20cm。断面:直状。	人為的埋土。	23
	SK29	N区	円形状か。径(85)cm。深さ60cm。断面:円筒状。	人為的埋土。底面より種子。	24

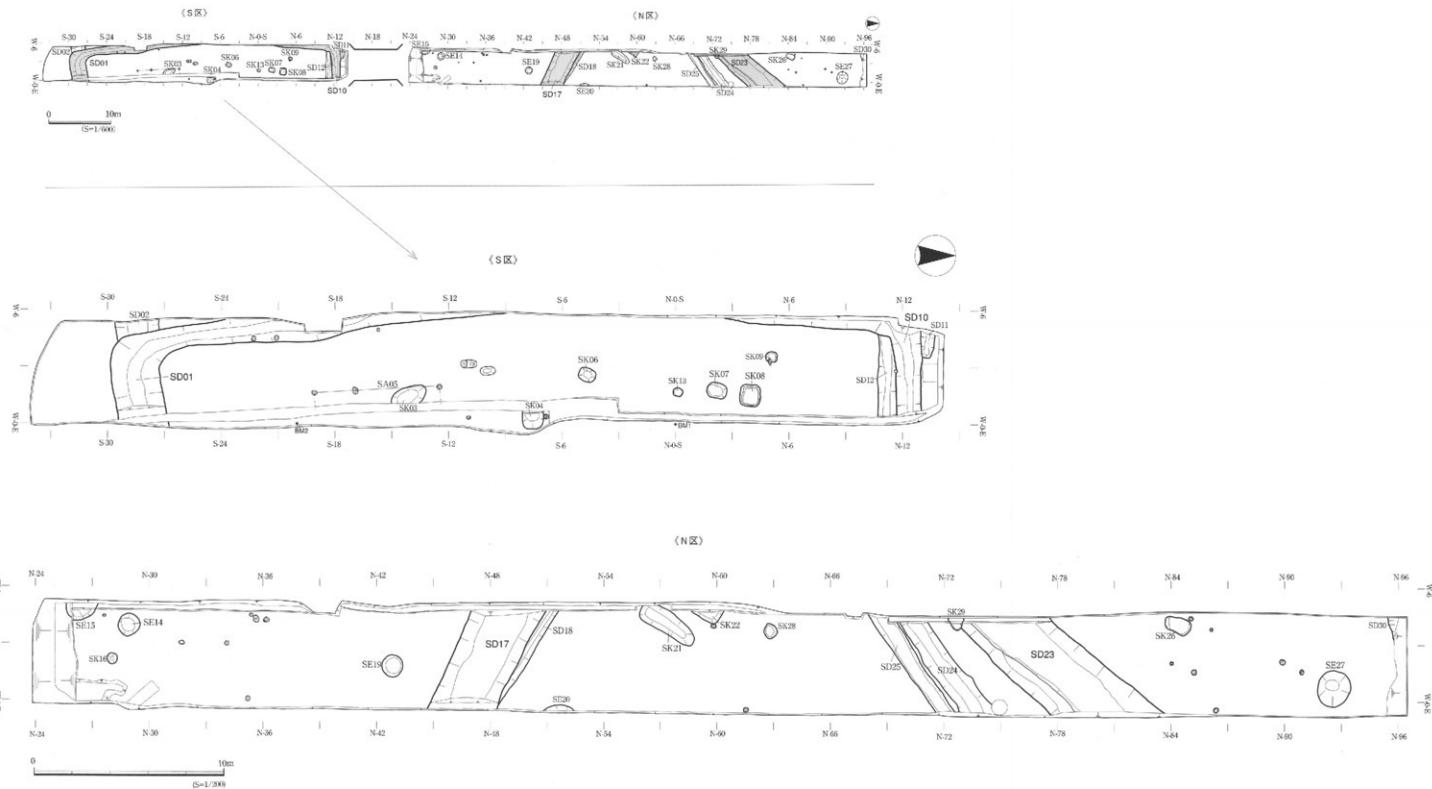
2) 遺構と遺物

（S区）

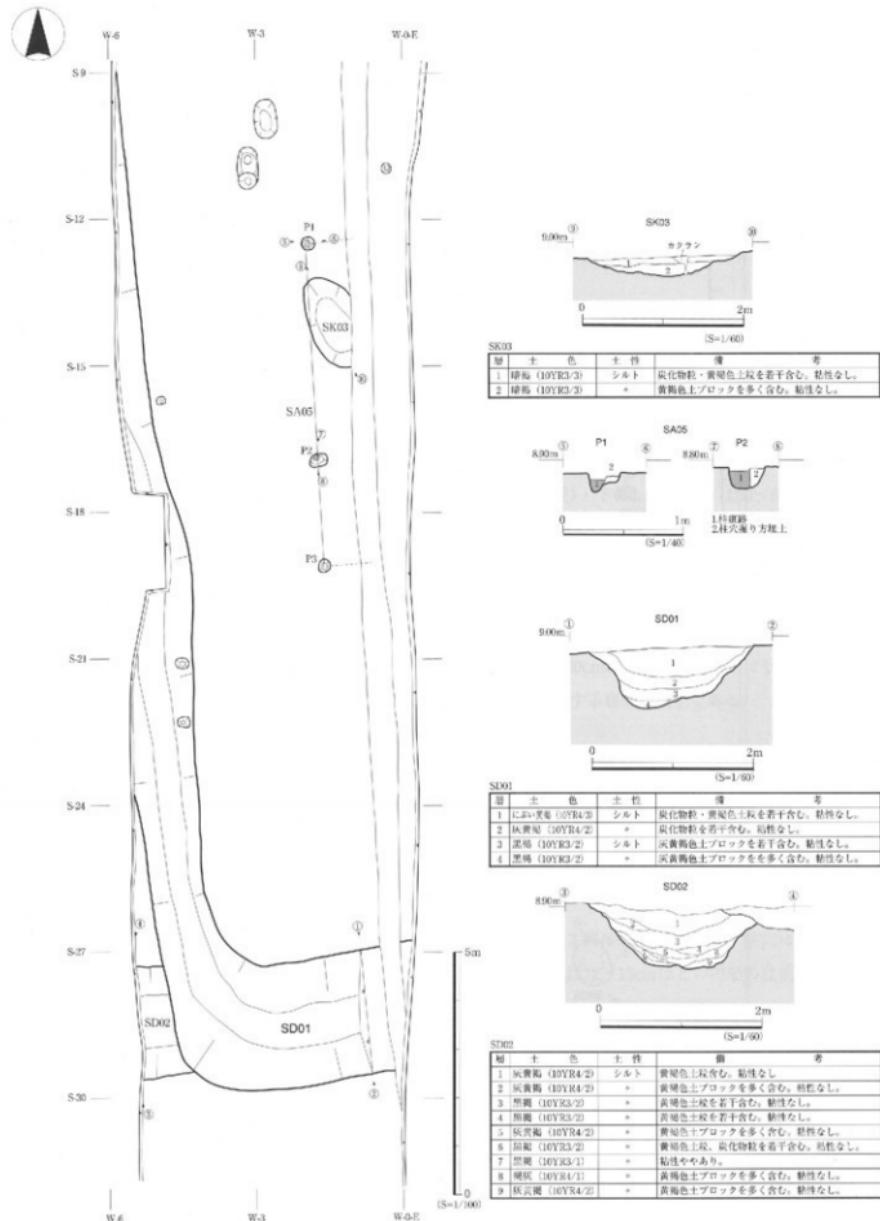
A. 区画溝跡、その他の溝跡

【SD01・SD10】（第20図～第22図、図版5-1・2、図版6-1・2・4、図版7-1）

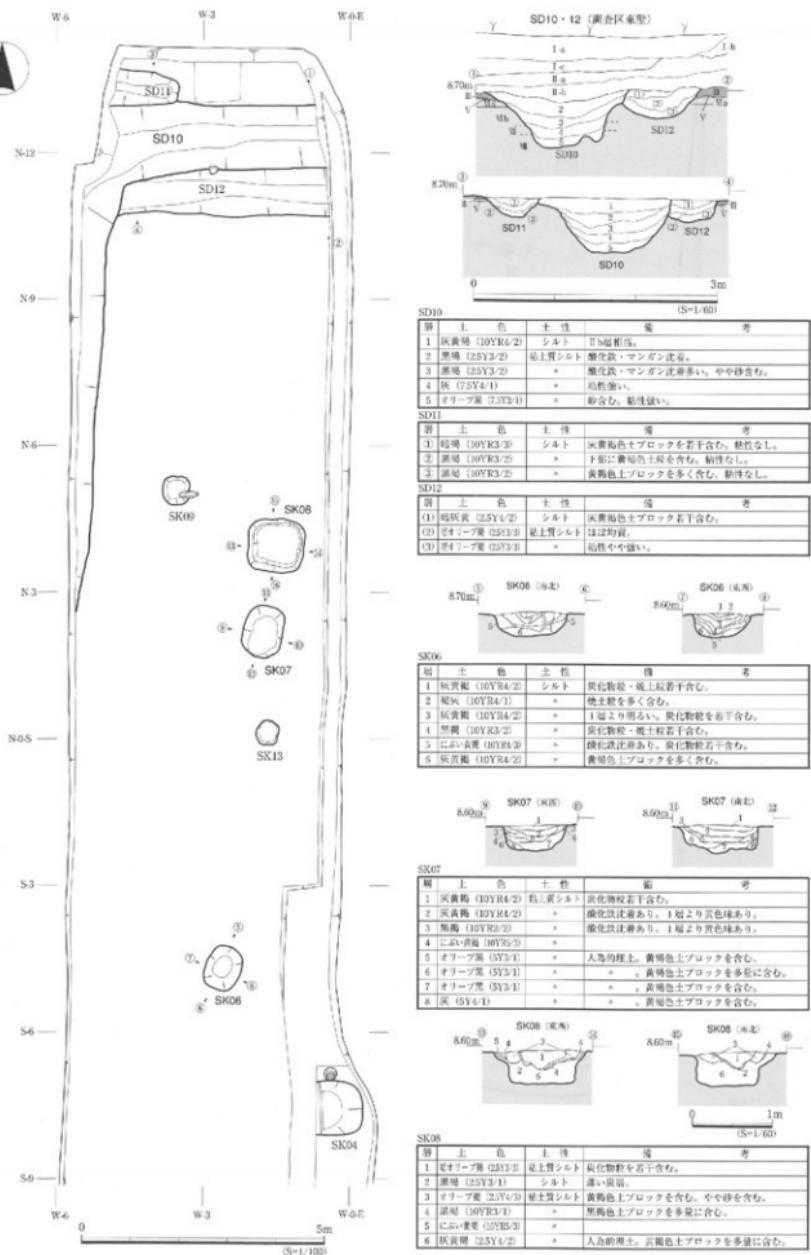
S区に位置する。南側のSD01と北側のSD10は、その配置や規模からみて一連の区画溝跡とみられ



第19図 中世造構全体図



第20図 S区南の構造



第21図 S区北の遺構

る。西辺は調査区西壁とほぼ重複しており部分的な検出にとどまっているが、西辺の総長は約21mほどである。この区画溝はSD02・SD11・SD12溝跡と重複し、SD02・SD12より新しく、SD11よりも古い。西辺は北で西へ約2°偏する。

南側のSD01は、上幅2.5m・下幅0.5~0.8m、深さ75~80cm、断面形はU字形を呈する。堆積土は4層に大別され、上半部はにぶい黄褐色～灰黄褐色シルト、下半部は黒褐色シルトを主体とする。北側のSD10は上幅1.5~1.6m・下幅0.3~0.7m、深さ65~70cm、断面形はU字形を呈する。堆積土は4層に大別され、上半部は黒褐色粘土質シルト、下半部は灰色～オリーブ黒色粘土質シルトを主体とする。いずれも自然堆積土である。

遺物はSD01から三筋文壺（常滑）・蓮弁文壺（渥美）、陶器鉢・甕（常滑ほか）（第22図-1~11）、SD10から陶器甕（常滑ほか）（第22図-12・13）などの破片が比較的多く出土している。2の渥美産壺は第27図-3と同一個体の可能性がある。

【SD02】（第20図・第22図、図版6-3）

S区西南隅を東西方向に延びる溝跡である。SD01区画溝の南辺とほぼ重複しており、ごく一部が確認できたのみである。SD01よりも古い。上幅約3.5m（調査区西壁）・下幅1.1m、深さは80~85cmほどある。断面形はU字形を呈する。堆積土は灰黄色～黒褐色シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は陶器甕（第22図-14）、古代の土師器・須恵器小片などが出土している。

【SD12】（第21図・第22図、図版6-4）

S区北端を東西方向に直線的に延びる溝跡である。SD10区画溝跡と重複し、これよりも古い。方向は東で南へ約1°偏する。上幅60cm以上・下幅0.3~0.5m、深さは30cmほどある。断面形はU字形を呈する。堆積土は暗灰黄色～暗オリーブ褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は古代の土師器小片が出土したのみである。

B. 柱穴列

【SA05】（第20図）

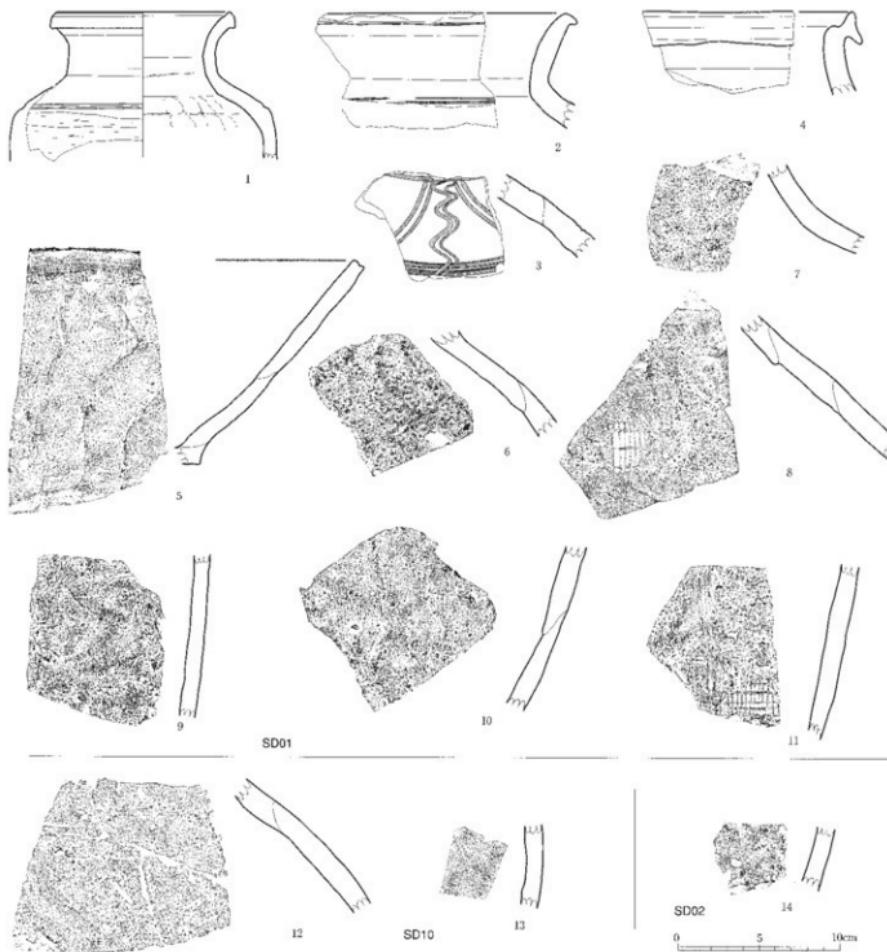
S区南に位置する南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は3個であるが、配置からするとこれらの柱穴列は東へ展開する掘立柱建物跡の一部である可能性もある。

柱穴列の方向は北で西へ約3°偏する。総長は約6.5m、P2-P3間は約2.1mである。柱穴は径30~35cmの円形状を呈し、深さは15cmほどである。P2・P3では径12~15cmほどの円形の柱痕跡が確認されている。

C. 土壌

【SK03】（第20図）

S区中央東寄りに位置する。現水道管に一部が壊されている。平面形は楕円形状、断面形は皿状を呈する。長軸約190cm・短軸約110cm、深さは20~25cmほどである。堆積土は2層に細分され、暗褐色シルトなどを主体とした自然堆積土である。



第22図 SD01・SD10、SD02出土遺物

No.	遺物／層	種別	器種	产地	特　徴	写真番號	註
1	S区 SD01 地	陶器	三折文壺	常滑	口径11.6cm。底部に沈殿（浮遊）。自然釉。（13C）	15-1	脚1
2	S区 SD01 地	陶器	三折文（高）壺	深美	側面ノボリ～3と同一個体か。表面に模様。口縁部内外面に医療ハケ彫り。（12～13C）	15-2	脚11
3	S区 SD01 地	陶器	造文壺	瀬戸	外腹に緑色釉。（12C）	15-3	脚3
4	S区 SD01 地	陶器	壺	常滑	口縁内側彫刻。内外面ナメ。（11C後半）	15-4	脚2
5	S区 SD01 地	陶器	鉢	常滑	外腹彫刻ナメ。口縁内側彫刻。（13C）	15-5	脚12
6	S区 SD01 地	陶器	鉢	常滑	外腹彫刻。	15-6	脚19
7	S区 SD01 地	陶器	壺	東海	内外面ナメ	15-7	脚5
8	S区 SD01 地	陶器	壺	余波	外面に押印（墨状）。自然釉。	15-8	脚18
9	S区 SD01 地	陶器	壺	東海		15-9	脚6
10	S区 SD01 地	陶器	壺	常滑		15-10	脚16
11	S区 SD01 地	陶器	壺	東海	外側に押印（墨状）	15-11	脚30
12	S区 SD01 地	陶器	壺	東海	外腹ナメ。内面ナメエ。ナメ	15-12	脚29
13	S区 SD01 地	陶器	壺	東海	外腹ナメ。内面ナメエ。ナメ	15-13	脚40
14	S区 SD02 地	陶器	壺	常		15-14	脚22

遺物は古代の土師器小片が出土したのみである。

【SK07】(第21図、図版7-2)

S区北に位置する。平面形は楕円～隅丸方形状、断面形はやや不整な箱形を呈する。長軸約110cm・短軸約80cm、深さは32～35cmほどである。堆積土は8層に細分されるが、上半が灰黄褐色～黒褐色粘土質シルトなどを主体とした自然堆積土、下半が地山ブロックを多く含むオリーブ黒色粘土質シルトを主体とした人為的埋土である。

遺物は古代の土師器小片が出土したのみである。

【SK08】(第21図、図版7-2)

S区北に位置し、前述のSK07からは1.5mほど北にある。平面形は隅丸方形状、断面形は概ね箱形を呈するが、上部は外へ開く。一辺約110cm、深さは40cmほどである。堆積土は6層に細分されるが、上半が暗オリーブ褐色～黒褐色粘土質シルトなどを主体とした自然堆積土、下半が地山ブロックを多く含む暗灰黄色粘土質シルトを主体とした人為的埋土である。

遺物は古代の土師器小片が出土したのみである。

〈N区〉

A. 区画溝跡、その他の溝跡

【SD17・SD23】(第23図～第25図、図版7-4、図版8-1～3、図版9-1-2)

N区中央に位置する。南側のSD17と北側のSD23は、その西延長部がほぼ直交することや規模・堆積土の特徴が類似することから両者は一連の区画溝跡とみられる。この区画溝はSD18溝跡、SK29と重複し、SD18より新しく、SK29よりも古い。北側のSD23は、北で東へ約39° 傾する。

南側のSD17は、上幅約3.5m・下幅1.8～2.0m、深さ1.4～1.5m、断面形はU字形を呈する。堆積土は12層に細別されるが、上位は暗灰黄色粘土質シルト、中位は植物遺体を含むオリーブ黒色粘土、下位は灰色～オリーブ黒色粘土・砂質シルトを主体とし、下半部は全体的にグライ化している。

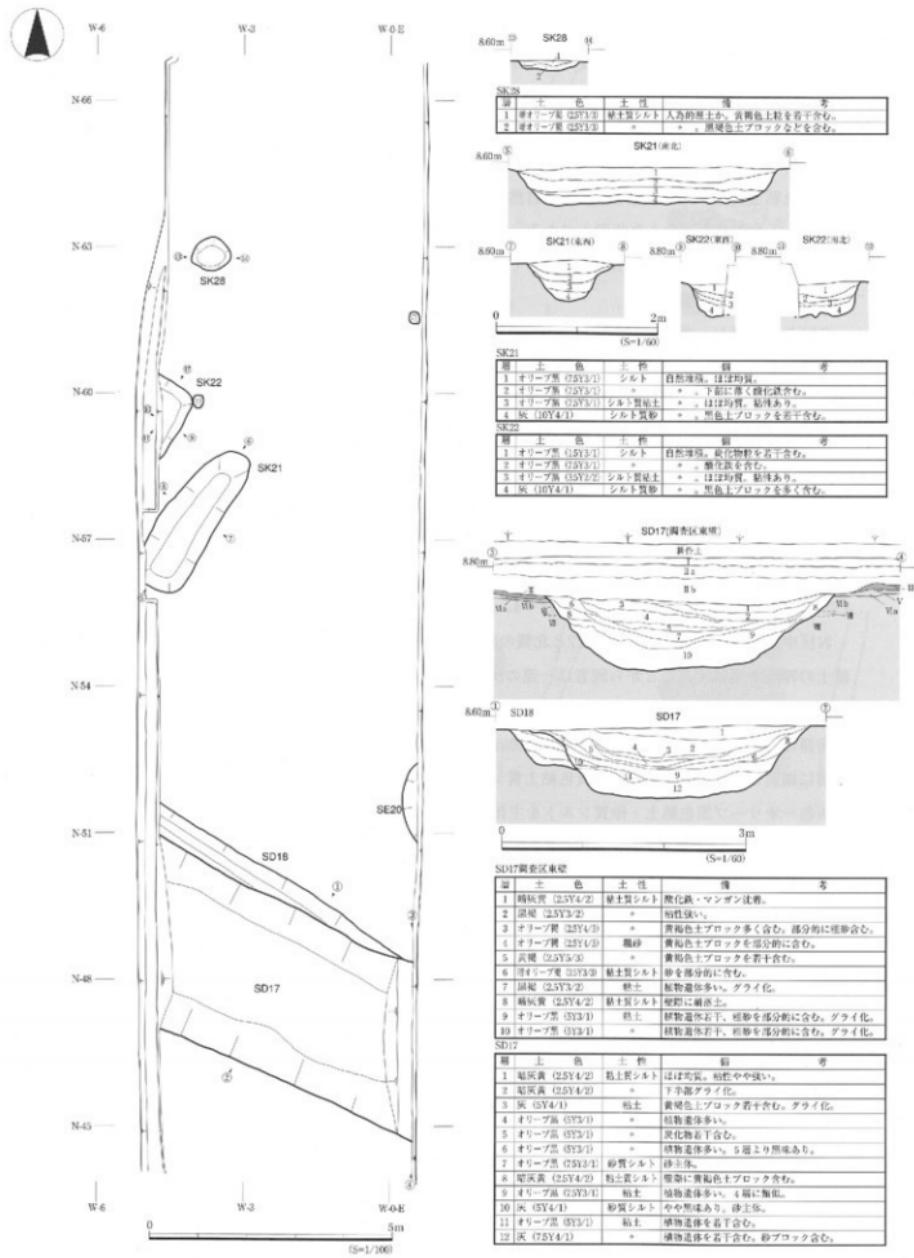
北側のSD23は、上幅約3.8m・下幅1.8～2.2m、深さ1.4～1.5m、断面形はU字形を呈する。堆積土は9層に細別されるが、基本的にSD17とほぼ同様の堆積を示す。

遺物はSD17から陶器鉢・壺・甕（常滑・在地ほか）（第25図-1～5）、砥石（第25図-6）、SD23から擂鉢・陶器甕（常滑・在地ほか）（第25図-8～11）、陶器縁輪小皿（古瀬戸）（第25図-7）、鉄滓などの破片が少量出土している。

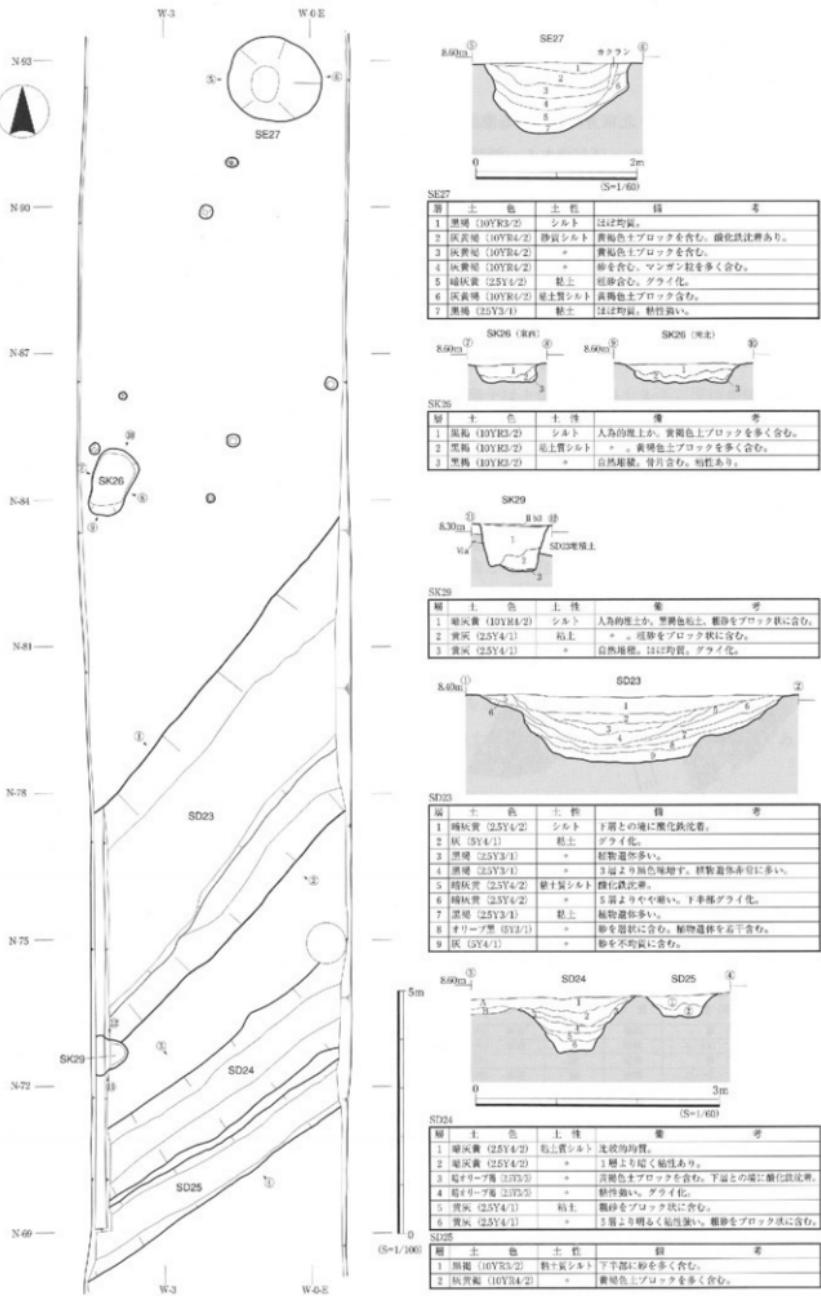
【SD24】(第24図・第25図)

N区北側を南西～北東方向に延びる溝跡である。北隣のSD23区画溝跡とは直接の重複関係は確認できなかったが、調査区東壁で堆積層を観察すると、SD24上部に堆積する層をSD23が切っていることからSD23よりも古い溝跡と考えられる。方向は東で北へ約35° 傾する。上幅約1.5m・下幅0.5～0.6m、深さは70cmほどある。断面形は概ね逆台形状を呈する。堆積土は上半が暗灰黄色～暗オリーブ褐色粘土質シルト、下位が黄灰色粘土を主体とする自然堆積土である。

遺物は陶器鉢・甕（常滑ほか）（第25図-13・14）の破片が出土している。



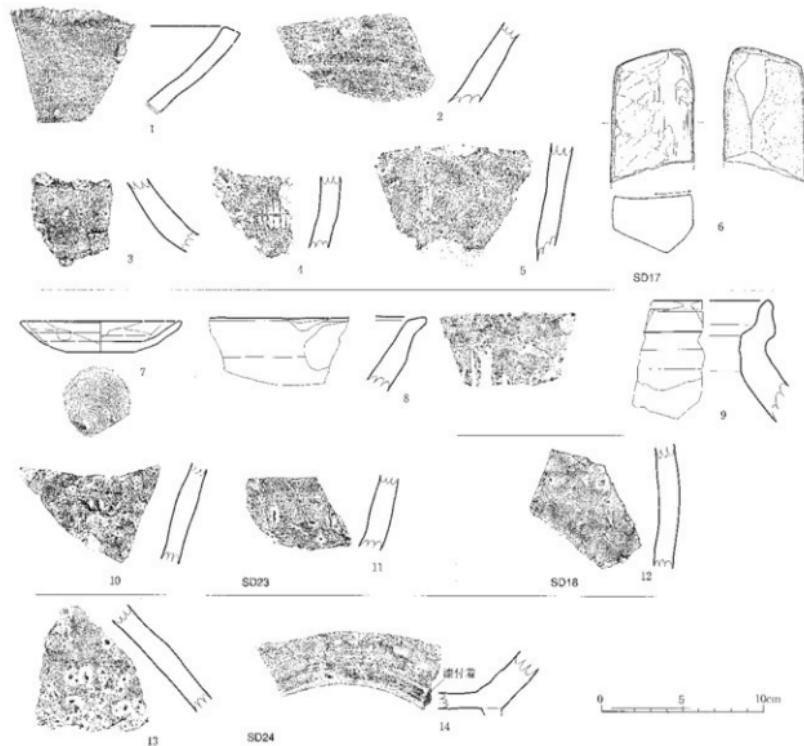
第23図 N区中央の遺構



第24図 N区北の遺構

【SD25】(第24図)

N区北側を南西-北東方向に延びる溝跡で、前述のSD24溝跡とはほぼ並行する。上幅約1.0m・下幅0.5~0.7m、深さは30cmほどである。断面形は概ね逆台形状を呈する。堆積土は上半が黒褐色粘土質シルト、下位が灰黄褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。遺物は出土していない。



No.	遺跡名	種別	西種	產地	特 記	写真回数	量 級
1	N区 SD17 墓	陶器	鉢	作陶	内外面ヨコナタ・縦用端	15-15	■R47
2	N区 SD17 墓1~2	陶器	鉢	瓦地	内外面ヨコナタ・内面平滑	15-16	■R42
3	N区 SD17 墓	陶器	甕		外沿自然斜	15-17	■R48
4	N区 SD17 墓1~2	陶器	甕	東海	縫印(裏状)	15-18	■R41
5	N区 SD17 墓3~12	陶器	甕		内外面ナラ	15-19	■R45
6	N区 SD17 墓1~2	石製品	硯石		迷彩砂岩・欠損品・長径(3.2)cm・幅5.2cm・厚3.3cm	14-17	石11
7	N区 SD23 墓2	陶器	小皿	土戸	山腹内外剥落地・底面部剥離切口(16C)	15-20	■R57
8	N区 SD23 墓1	陶器	縫井	瓦地	全体焼成・底凹	15-21	■R54
9	N区 SD23 墓1	陶器	甕	瓦地	内外面ナラ・表面骨針含合	15-22	■R51
10	N区 SD23 墓1	陶器	甕	東海	内外面ナラ	15-23	■R55
11	N区 SD23 墓1	陶器	甕	東海	内外面ナラ	15-24	■R52
12	N区 SD18 墓3	陶器	甕	東海	縫印(裏状)・自然斜	15-25	■R40
13	N区 SD24 墓2	陶器	甕	東海	自然斜	15-26	■R59
14	N区 SD24 墓1~2	陶器	盆		凸台剖面・内面平滑・漆跡	15-27	■R58

第25図 SD17・SD23・SD24出土遺物

B. 井戸跡

N区で7基検出されているが、いずれも素掘りのものである。

【SE14】(第26図、図版9-3)

N区南西隅に位置する。平面形は径110cmほどの円形で、断面形は漏斗形を呈する。深さは90cm以上ある。堆積土は上位が黒褐色シルト、下位が黒色粘土質シルト～シルト質砂を主体とする自然堆積土である。

遺物は出土していない。

【SE15】(第26図・第27図、図版7-3)

N区南西隅の壁際に位置する。前述のSE14からは2mほど南にある。平面形は径160cmほどの円形で、断面形は漏斗形を呈する。深さは130cm以上ある。堆積土は上位が黒褐色シルト、下位が灰黄褐色砂質シルト～オリーブ黒色砂質シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は曲物の底板とみられる円形状の板材（第27図-1）が1点出土したのみである。

【SE19】(第26図、図版9-4)

N区南に位置する。平面形は径110cmほどの円形で、断面形は円筒形を呈する。深さは80cmである。堆積土は黒褐色粘土質シルト～オリーブ黒色粘土を主体とする自然堆積土である。

遺物は出土していない。

【SE27】(第24図)

N区北端に位置する。平面形は径180cmほどの円形で、断面形は崩落のためか不整なU字形を呈する。深さは約90cmである。堆積土は上位が灰黄褐色砂質シルト、下位が暗灰黄色～灰黄褐色粘土などを主体とする自然堆積土である。底面近くには黒褐色粘土が認められる。いずれも自然堆積土である。

遺物は出土していない。

C. 土壌

【SK21】(第23図、図版9-5)

N区中央に位置する。平面形は隅丸長方形状、短軸断面形はU字形を呈する。長軸320cm・短軸110cm、深さは40～45cmほどである。堆積土は4層に細分される。オリーブ黒色シルトなどを主体とする自然堆積土である。

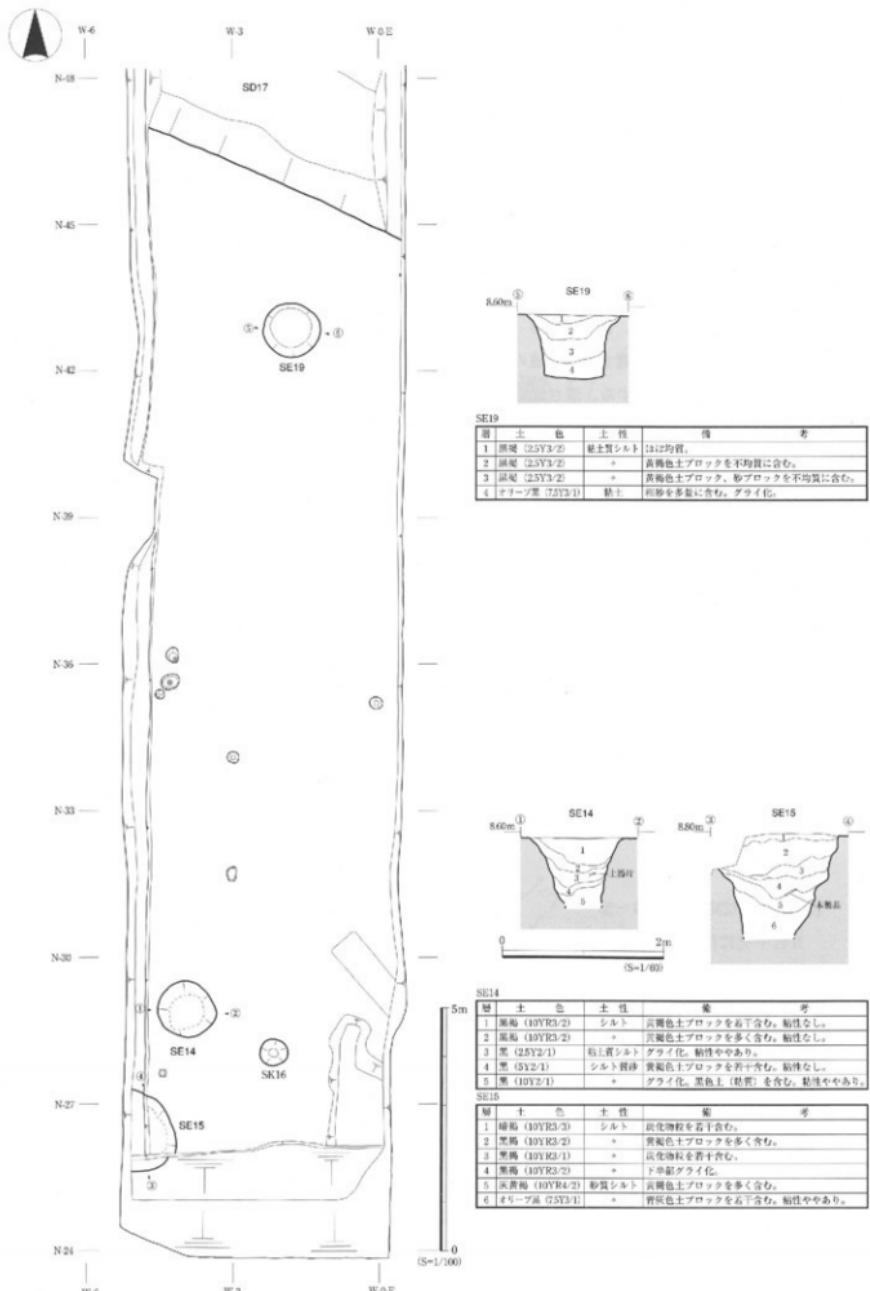
遺物は古代の土師器小片が出土したのみである。

【SK22】(第23図、図版9-5)

N区中央に位置する。前述のSK21のすぐ西隣にあり、並列している。大半が調査区外であるがSK21と同じ形状の土壤と考えられる。深さは40cmほどである。堆積土はオリーブ黒色シルトなどを主体とする自然堆積土で、SK21とはほぼ同じである。

遺物は古代の土師器小片が出土したのみである。

【SK26】(第24図、図版9-6)



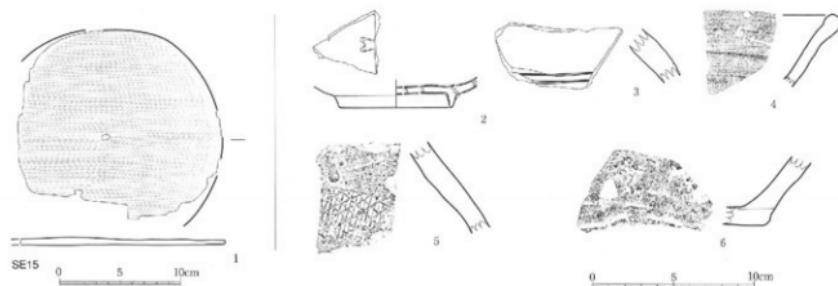
第26図 N区南の遺構

N区北に位置する。平面形は梢円形状、短軸断面形はやや不整な浅い箱形を呈する。長軸140cm・短軸80cm、深さは20~25cmほどである。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト・粘土質シルトなどを主体とする人為的堆土であるが、底面近くには黒褐色粘土質シルトの自然堆積層が認められる。

遺物は底面付近からウマの歯とみられる断片が少量出土している。

《その他の出土遺物》（第27図・第28図、図版15）

SD23とSD24溝跡の間の自然堆積層（B層：暗オリーブ褐色シルト）から青磁双魚文盤（龍泉窯系）（第27図-2）、遺構確認時に陶器鉢・三筋文（系）壺・壺（渥美ほか）（第27図-3~6）などの破片が少量出土している。第27図-3の三筋文（系）壺の肩部片は、第22図-2と同一個体の可能性がある。



No.	遺跡／番	種別	器種	産地	特徴	年月回数	登録
1	N区 SE15	木製品	漆物灰板	漆 (18.6) cm 厚3~7 mm		14.18	本1
2	N区 D型	青磁	壺	龍泉窯 双魚文 (13C 後半)		15.28	研1
3	S区 遺構確認時	陶器	三筋文 (高) 壺	渥美 復原 (2 種) 斜縞ハケ垂り 第22図-2と同一個体か (12~13C)		15.29	附31
4	S区 遺構確認時	陶器	鉢	東路 内外面ナデ (13C)		15.30	附38
5	S区 遺構確認時	陶器	壺	渥美 (船子+変形)		15.31	附37
6	S区 遺構確認時	陶器	盆	内外面ナデ 内面平滑		15.32	附35

第27図 SE15、その他の出土遺物

第IV章 総括

今回の調査区は幅6m×総長121mと狭長なことから検出遺構の状況を把握するのは容易ではないが、これまで述べてきた古代および中世の主要な遺構・遺物について、部分的ではあるもののその要点を整理しておきたい。

1. 古代

(1) 壁穴住居跡について

2軒の壁穴住居跡（SI108・SI109）が検出されたが、いずれも調査区外へと広がっているため、その全体形状や規模などについては不明である。SI109住居跡はかろうじて住居跡の西半部とカマド・煙道の一部が検出できた。主柱穴などは検出されていない。ただ、住居中央部を中心として一度貼り床がなされていることが確認されている。出土遺物をみると、土師器はいずれもロクロ調整で、須恵器壺には底部が回転ヘラ切り無調整と回転糸切り無調整のものがある。全体形がわかる資料はないが、これらの遺物を見る限りでは、おおむね9世紀前半頃に位置づけられるものと思われる。

SI108はこのSI109と重複しこれよりも古いが、両者の西辺はほぼ同じ位置にある。カマドは東辺に取り付く可能性がある。出土遺物には、非ロクロ調整の土師器壺などが含まれているものの、SI109と同様に須恵器壺には底部が回転ヘラ切り無調整や回転糸切り無調整のものが含まれており、年代的にはやはり9世紀前半頃と推測される。

(2) 周溝状遺構について

平面形が弧状になる周溝状遺構は3条検出されている。SD105はSI109住居跡の下で検出されたSD115と一緒にものである可能性がある。その場合、この周溝状遺構の少なくとも西側は途切れることになる。また、SB116建物跡は、位置関係からみてこの周溝状遺構と組み合う可能性がある。つまり、SB116建物跡を中心としてその周囲をSD105・SD115（溝跡）が巡っているという構成になる。このような形態・構成をもつ遺構は以前の調査でも6ヶ所確認されており、今回の調査区から南西へ50mほど離れた区域でも検出されている（宮城県教育委員会1998・2001a）。

SD105（SK107を含む）の出土遺物をみると、土師器には非ロクロ調整とロクロ調整のものがあり、須恵器壺には底部が回転ヘラ切り無調整と回転糸切り無調整のものが含まれている。壺類は口径に比べて底径がやや小さいものである。これらは年代的には9世紀前半頃と考えられる。ただし、SB116とSD115はSI109住居跡に切られており、またSI108とは位置的に同時存在は考えにくいことから、SB116建物跡・SD105（SD115）周溝状遺構はSI108・SI109住居跡よりも時期的にはやや古く位置づけられるものとみられる。

SD110とSD114については、平面的には重複していることから造り替えの可能性が考えられる。柱穴などは内側区域では検出されていないが、位置的には調査区外にある可能性がある。年代についてははつきりしない。

2. 中世

(1) 造構について

S区およびN区では、大溝で区画された区域がそれぞれ1ヶ所ずつ検出されている。全体の規模などは不明であるが、これらは以前の調査で検出されている中世期の屋敷の区画の一角をなすものと考えられる（宮城県教育委員会 2001a）。

S区とN区では区画溝の方向（軸）に違いがある。南のS区ではSD01・SD10による区画はその軸がおおむね北方向を向くが、N区のSD17・SD23はその軸が大きく傾いている。出土遺物を見ると、S区のSD01からは常滑産三筋文壺や渥美産蓮弁文壺、鉢・甕などが出土しており、これらは年代的には12～13世紀頃を中心とする資料である（日本福祉大学知多半島総合研究所編 1994）。一方、N区のSD23からは古瀬戸縁軸小皿、在地産擂鉢・甕などが出土しており、少なくとも縁軸小皿は15世紀頃に位置づけられるものである（藤沢 2005、東北中世考古学会編 2003）。それぞれ点数は少ないものの、年代的な偏りをある程度認めることができることから、S区とN区の区画溝の方向性の違いは時期的な差を反映しているとみられ、南区画（SD01・SD10）が北区画（SD17・SD23）よりも古い時期のものと考えられる。

これらの区画溝と一緒にとして捉えられる造構については明確ではない。S区のSD01・SD10の内側にはSA05柱穴列（掘立柱建物跡の可能性もある）、SK03～08上塙などが点在するが、区画溝と同時期かどうかは判断が難しい。ただ、SA05については、その方向が区画溝とほぼ同じであることから同時期の可能性がある。N区のSD17・SD23の内側では並列するSK21・22上塙があるが、これらの長軸方向は区画溝とおおむね一致しており、これらは同時期の可能性は高いとみられる。他に井戸跡が1基（SE20）分布するが、これについては伴うものかどうかは不明である。

(2) 遺物について

中世の遺物には、磁器（1点）、陶器（63点：破片数）、砥石（1点）などがあり、点数的には少ない。陶器類は灰釉小皿1点を除いていずれも破片資料であり、口縁部資料はそのうち8点のみである。これらの資料の多くは区画溝SD01・10とSD17・SD23からの出土である。

磁器は、双魚文を配した小型の盤とみられる青磁破片が1点ある。同様の双魚文青磁は県内では名取市川上遺跡（名取市教育委員会 1990）などでも出土している。年代的には13世紀後半頃に位置づけられるものであろう（森 2000）。

陶器は常滑産を中心として、渥美産や瀬戸産、在地産のものが認められる。これらの中には常滑産三筋文壺や渥美産蓮弁文壺などの資料が含まれている。渥美産蓮弁文壺は肩部の破片であるが、二段の平行沈線間に八字状に円弧が描かれ、その間に波状の沈線が継に通っている。このような蓮弁文壺および三筋文壺は、年代的にはいずれも12～13世紀頃のものと推定される（日本福祉大学知多半島総合研究所編 1994）。また、古瀬戸の縁軸小皿は15世紀頃の後期様式のものである（藤沢 2005）。

なお、当遺跡が立地する鳴瀬川の上流約15kmには中世の三本木窯（多高田窯：藤沼ほか 1978）があるが、在地産の資料の中で三本木窯の製品とみられるものについては明確に確認できなかった。

引用・参考文献

- 赤羽一郎・小野川勝一編 1977『常滑・渥美』日本陶磁全集8（中央公論社）
- 飯村 均 1995『東北諸窯』概説 中世の土器・陶磁器 pp. 425～436 中世土器研究会
- 工藤雅樹・藤沼邦彦ほか 1979『伊豆沼古窯 猿丸A窯跡発掘調査報告』東北歴史資料館
- 小牛田町教育委員会 1976『山前遺跡』
- 1998『駒米遺跡』小牛田町文化財調査報告書第3集
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』（新陽社）
- 東北中世考古学会編 2003『中世奥羽の土器・陶磁器』（高志書院）
- 中野晴久 2005『常滑・渥美』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～免衣要旨集』 pp. 49～76
- 名取市教育委員会 1990『川上遺跡－中世における名取熊野郡皆神門前宿跡調査－』名取市文化財調査報告書第25集
- 橋崎彰一 1978『初期中世陶における三筋文の系譜』『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV pp. 99～145
- 日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会編 2001『都市・平泉－成立とその構成－』『日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集』
- 日本福祉大学知多半島総合研究所編 1994『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
- 藤沢良祐 1997『中世窯戸窯の動態』『湘南市埋蔵文化財センター研究紀要』第5号 pp. 43～58
- 2005『施釉陶器生産技術の伝播』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～免衣要旨集』 pp. 5～48
- 藤沼邦彦 1977『宮城県出土の中世陶器について』『東北歴史資料館研究紀要』第3卷 pp. 21～45
- 1991『東北地方出土の常滑焼・渥美焼について』『知多半島の歴史と現在』3 pp. 29～56 日本福祉大学
知多半島総合研究所
- 藤沼邦彦ほか 1978『多田野窯跡調査報告書』三本木町教育委員会
- 美里町教育委員会 2007a『一本柳遺跡・牛飼遺跡』美里町文化財調査報告書第1集
- 2007b『小沼遺跡』美里町文化財調査報告書第3集
- 宮城県教育委員会 1980『觀音沢遺跡』『東北新幹線関係窯跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第72集
- 1996『一本杉窯跡』宮城県文化財調査報告書第172集
- 1998『一本柳遺跡I』宮城県文化財調査報告書第178集
- 2000『一本柳遺跡・小沼遺跡』『名生館遺跡 ほか』宮城県文化財調査報告書第183集
- 2001a『一本柳遺跡II』宮城県文化財調査報告書第185集
- 2001b『一本柳遺跡・小沼遺跡』『名生館遺跡 ほか』宮城県文化財調査報告書第187集
- 2002『一本柳遺跡・小沼遺跡』『名生館遺跡 ほか』宮城県文化財調査報告書第188集
- 2006『中野高柳遺跡IV－宮城県仙台港背後地出土曲面埴製事業窯跡調査報告書』宮城県文化財調査報告
書第204集
- 森 達也 2000『宋・元代竈泉窯青磁の編年的研究』『東洋陶磁』VOL29 pp. 77～103

写 真 図 版



1. 一本柳遺跡の空中写真（上が北）

国土交通省：国土画像情報（昭和50年撮影
カラー空中写真、整理番号：CT0-75-27-C14B-14
縮尺：約1/13,000



2. 調査地点近景（南より）

図版1 一本柳遺跡と調査地点



1. S区（1区）全景（南から）



2. SI108・SI109往届跡
SD105周溝状造構付近（南から）



3. SD110周溝状造構付近（南から）

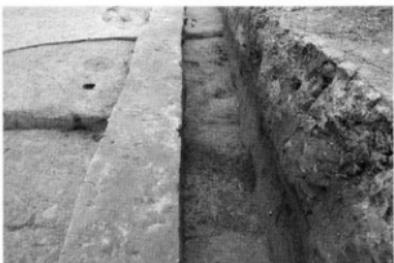
図版2 古代の造構（1）—S区—



1. SI108・SI109住居跡（南から）



2. SI108・SI109住居跡（南から）



3. SI109カマド部分（南から）



4. SI109カマド付近：調査区東壁断面（南西から）

図版3 古代の遺構（2）—S区—



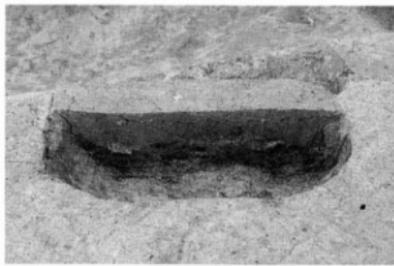
1. SB116遺物跡（南から）



2. SD105周溝状遺構（西から）



3. SD105断面（南から）



4. SK101土壤断面（南西から）

図版4 古代の遺構（3）－S区－



1. 猿窓器壺出土状況（西から）



2. 土器集中地点（西から）



3. S区（1区）全景（南から）
—中世—



2. S区（2区）全景（北から）
—中世—

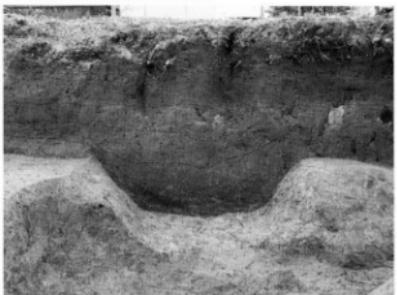
図版5 古代の遺構（4）、中世の遺構（1）—S区—



1. SD01区画溝跡（東から）



2. SD01断面（西から）



3. SD02溝跡断面（東から）



4. SD10区画溝跡（南西から）

図版 6 中世の遺構（2）—S区—



1. SD10区蓋溝跡、SD12清詰断面（西から）



2. SK07・SK08土板（西から）



3. N区（3区）全景（南から）



4. N区（4区）全景（北から）

図版7 中世の遺構（3）—S区・N区—



1. N区（5区）全景（南から）



2. SD17区画溝跡（西から）



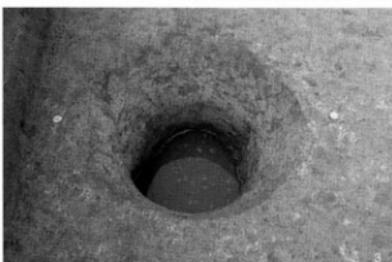
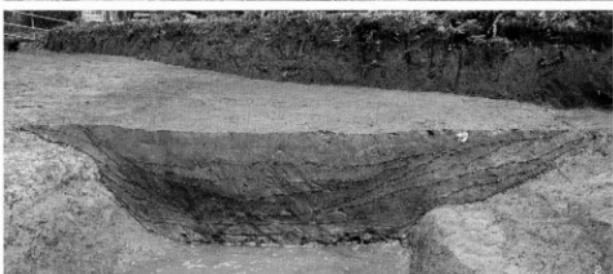
3. SD17断面（西から）

図版8 中世の遺構（4）—N区—

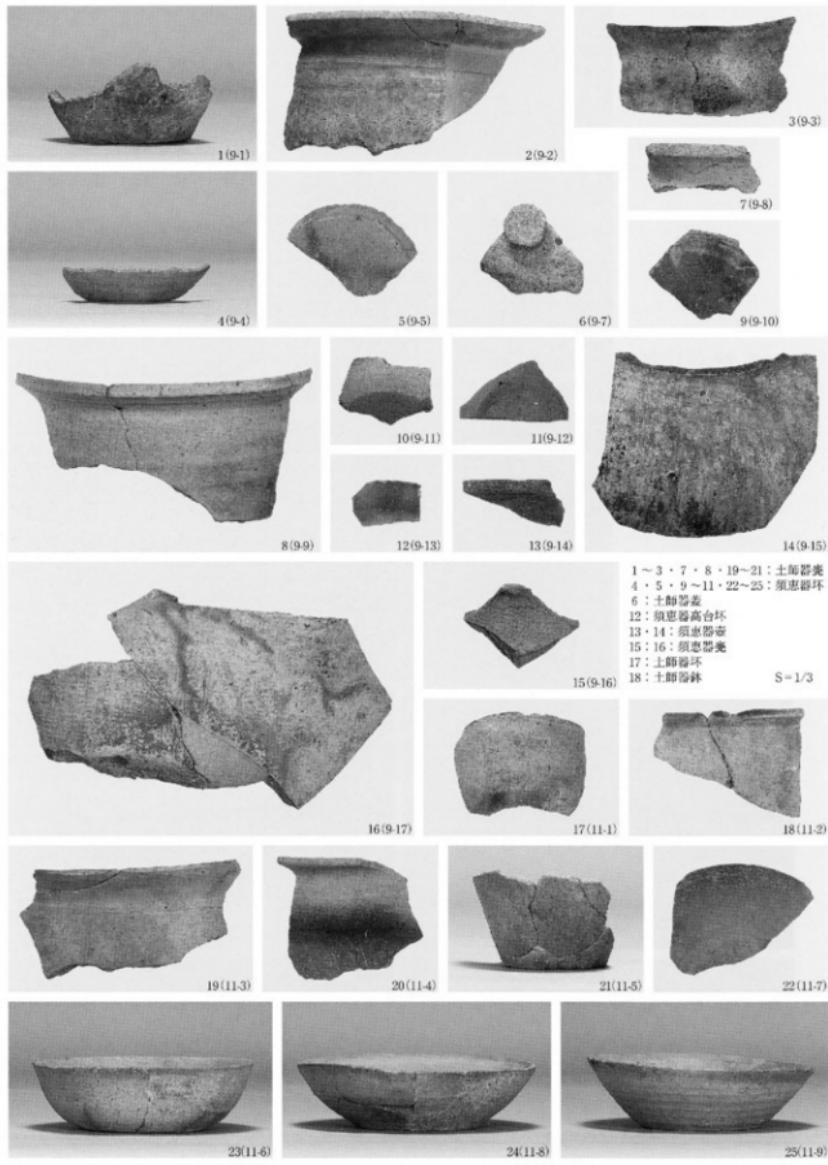
1. SD23区面溝跡（南西から）



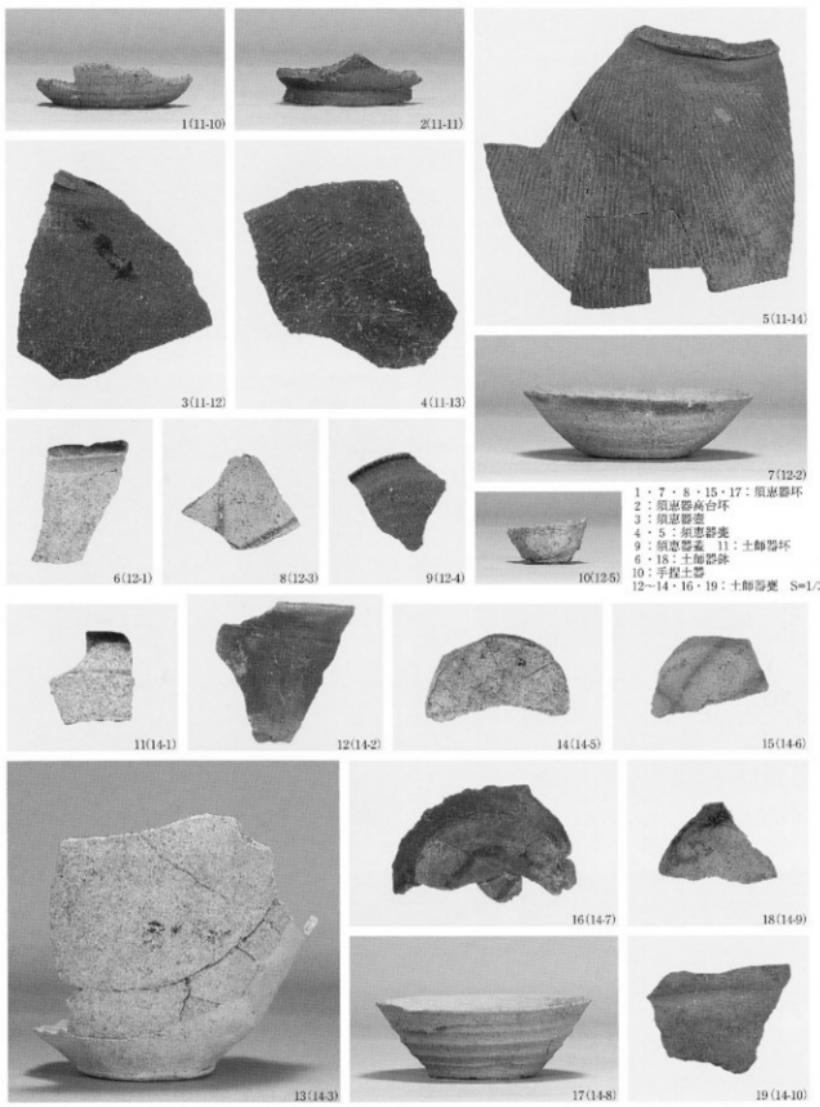
2. SD23断面（西から）
3. SE14井戸跡（東から）
4. SE19井戸跡（東から）
5. SK21・22土壙（北東から）
6. SK26土壙（東から）



図版9 中世の遺構（5）—N区—



図版10 古代の遺物 (1)



1～10：SD105周溝状遺構 11～13：SD110周溝状遺構 14：SD114周溝状遺構
 15～16：SD102溝跡 17～19：SK101土壁

() は図No.

図版11 古代の遺物 (2)



1a(15-1a)



2(15-2)



1b(15-1b)



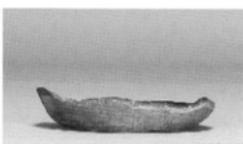
3(15-3)



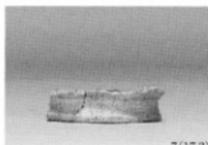
4(16-1)



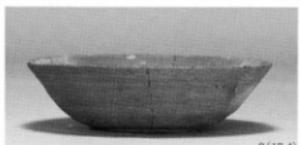
5(17-1)



6(17-2)



7(17-3)



8(17-4)



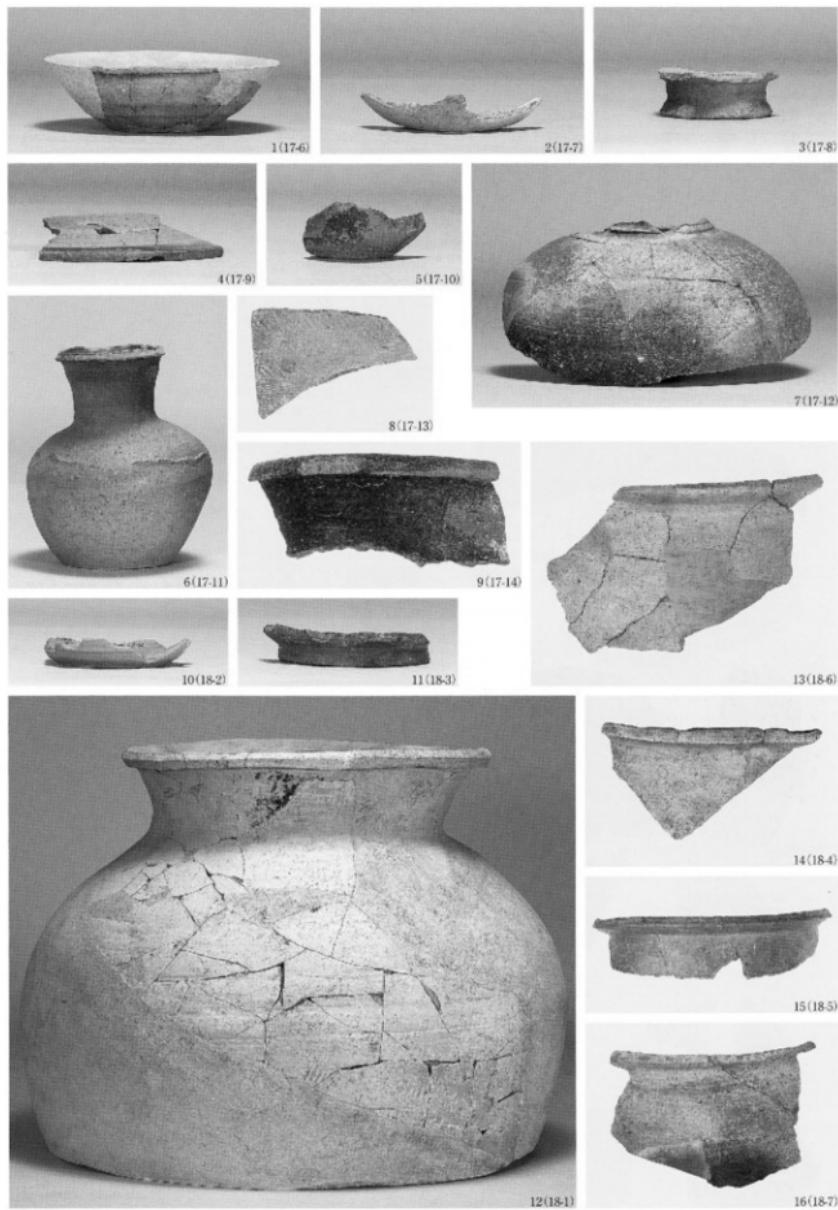
9(17-5)

1～3：上器集中地点 4：SD119裏跡 5～9：VI層はか

1～3：土師器甕 5・6：土師器甕 S=1/3
4・8・9：須恵器甕 7：土師器高台環

図版12 古代の遺物（3）

（ ）は図No.



1~16: 須居ほか

1・2・10: 須居器坏

3: 須居器高台坏

4: 須居器蓋

7: 須居器長頭壺

11: 須居器輪用模

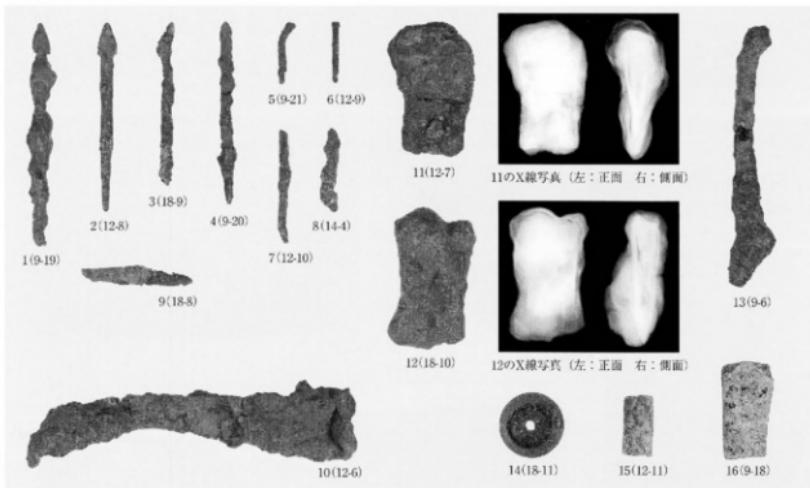
5・6: 須居器壺

8・9・12: 須居器蓋

13~16: 土師器型 S~1/3

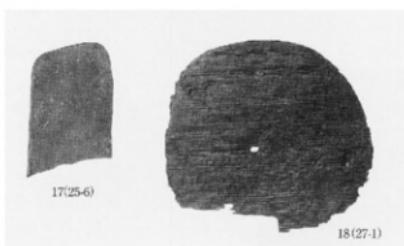
() は闇No.

図版13 古代の遺物 (4)



1 ~ 4 : 鉄鎌 5 ~ 8 : 鉄釘 9 : 刀子 10 : 鉄鎌 11・12 : 鉄斧 a S=1/3
13 : 不明鉄製品 14 : 織錆車 15・16 : 瓦石 () は図No.

1・4・5・16 : SD109住居跡 13 : SD108住居跡
2・6・7・10・11・15 : SD105周溝状遺構
8 : SD110周溝状遺構 3・9・12・14 : 瓦層ほか



17 : 瓦石 S=1/3
18 : 曲物底板 S=1/4

17 : SD17溝跡
18 : SE15井戸跡

図版14 古代の遺物 (5) ・中世の遺物 (1)



図版15 中世の遺物 (2)

S=1/3 () は図Na.

報告書抄録

ふりがな	いっぽんやなぎいせき							
書名	一本柳遺跡							
圖書名								
卷次								
シリーズ名	美里町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第2集							
編著者名	岩淵竜也 佐久間光平 佐藤貴志							
編集機関	美里町教育委員会							
所在地	〒987-8602 宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13 TEL 0229-32-2378							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いっぽんやなぎ 一本柳遺跡	みやぎけんとおだぐん 宮城県遠田郡 みよしちょう 美里町 あやしのんへっぽんやなぎ 字新一本柳	045055	39044	38度31分26秒	141度5分42秒	2006.06.01 ~09.26	730m ²	道路改良
所収遺跡名・種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項		
一本柳遺跡 集落跡	古代	堅穴住居跡2軒 掘立柱建物跡1棟 周溝状遺構3条 溝跡(溝底遺構含む)8条 土壙2基			土師器 須恵器 鉄鎌 鉄鍊 鉄斧カ 砥石	古代の堅穴住居跡や周溝状遺構の年代は9世紀前半頃とみられる。		
	中世	区画溝跡4条(2対) 柱穴列1条 溝跡7条 井戸跡5基 土壙13基			中世陶器 青磁 砥石	中世は大溝で区画された区域(屋敷跡)が少なくとも2ヶ所あり。		

美里町文化財調査報告書第2集

一本柳遺跡

平成19年3月25日印刷

平成19年3月31日発行

発行 美里町教育委員会

宮城県遠田郡美里町北浦字胸糸13

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

